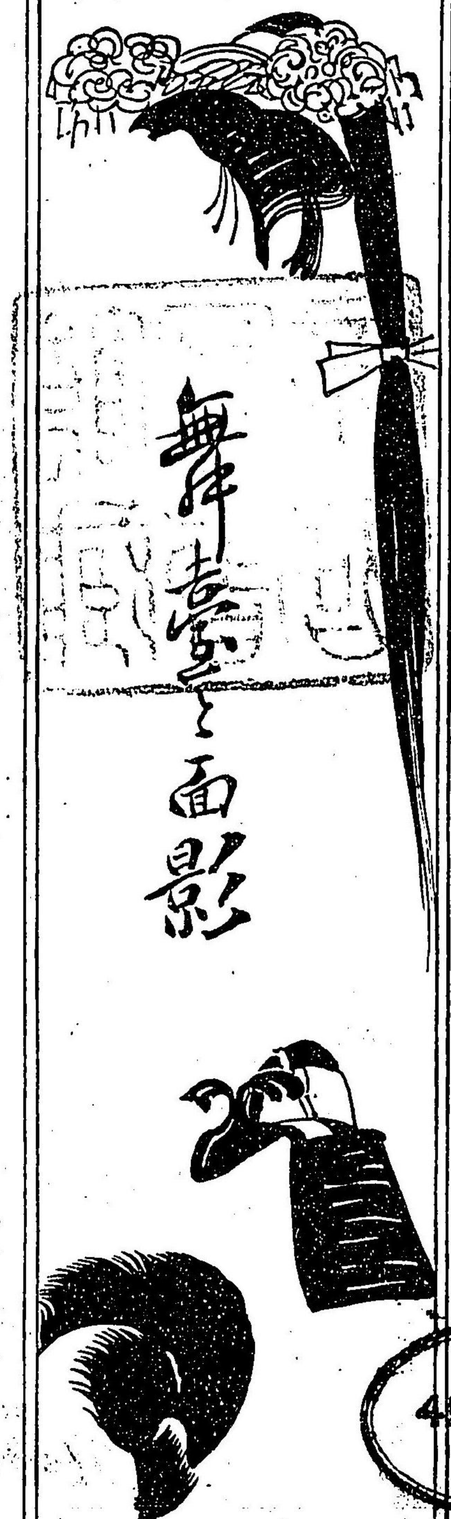
332-241

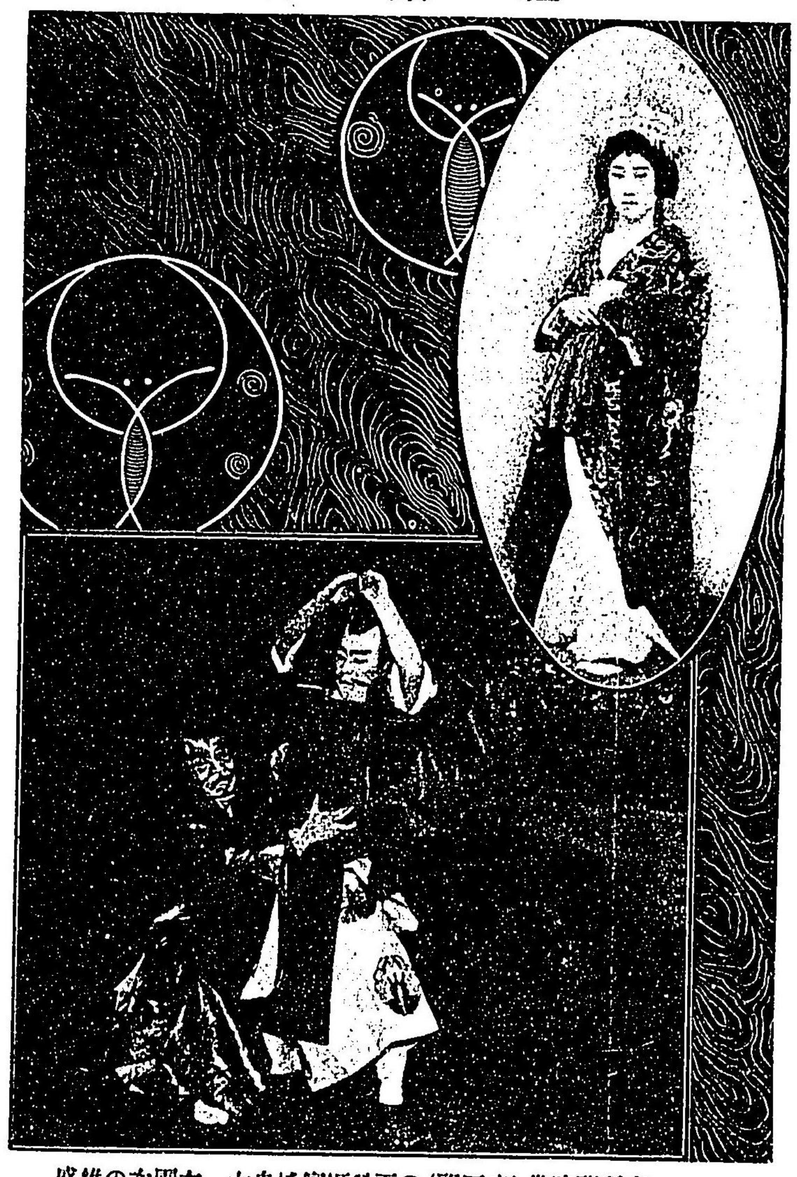


45. 3. 26
內交

安宅の關

八百藏の辨慶

紅葉狩



高麗藏時代（幸四郎）の更科姫實は鬼女　左團次の維盛

羽衣の舞　梅幸

歌舞伎

田高　野里の村多浮　井伊澤深

矢の根

高麗蔵時代（幸四郎）の矢野根五郎

暫　（其一）

中村吉右衛門の舘金剛丸照忠

暫　（其二）

仝　上

雜

録

（切　七）

名流の面影

阪東三津五郎

守田勘彌

尾上松助

『安宅の關』の型

登場人物

一武蔵坊弁慶　市川八百蔵
一富樫之介家直　市村羽左衛門
一源九郎義經　澤村宗十郎
一伊勢三郎　市川團右衛門
一常陸坊海尊　尾上松助
一駿河次郎　市川吉之助
一熊井太郎　市川市家三郎
一片岡八郎　片岡太郎
一亀井六郎　澤村紀升
一鷲尾三郎　鈍次郎
一増尾十郎　壽五郎
一番卒源内　橘咲
一同　平内　米助
一里ノ童　三人
一番卒　大勢
長唄連中　竹本連中

安宅の松の場

本舞臺すべて平舞臺、眞中に枝振りよき松の大樹、正面上手に峨々たる岩山、

安宅の關の型

下手遙かに海を見たる遠見の書割。

上手善き所に丸物の岩組より山水の落つることよろしく、松の根方に捨石三ツ四ッあり、上下岩の張物にて見切り、日覆ひより松の釣枝。

すべて越前安宅の松の邊の景色、時候は舊二月下旬の頃、下手山臺に長唄連中、上手山臺に竹本連中居並ぶ。

一聲山おろしにて幕開く、スグ長唄淨瑠璃になり。

長唄『旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしぼるらん、頃はさざらぎ末つかた、判官都をおちこちの、道なき山路踏み分けて、あじきなき世を忍ぶやま』

竹本『奥秀衡を木蔭ぞと、頼むもあはれ山櫻、花より外に知られじと、兜巾眼深かに召したまふ』

大小の合方になり、此文句の内、判官義經、兜巾篠懸に紫の水衣、太刀附脚袢、草鞋、提げ太刀、指し添へ、珠數金剛杖、笈、山伏の姿にて向ふ揚幕より出來り花道七三に止り土間の方を向く。

長唄『御供の人々は、伊勢の三郎義盛、駿河の次郎清重、片岡八郎常春、皆山伏の姿にて越路の旅に迷へとや。』

と此中伊勢の三郎、駿河の次郎、片岡八郎、いづれも山伏の笈、中啓の扇を持て出來り花道に止る。

竹本『増尾の十郎兼房が頭に殘す春の霜、熊井の太郎忠元と後に續いて龜井の六郎重清。』

ト此中増尾十郎、熊井太郎、龜井六郎、他の家來と同じ着付にて出で來り同じやうに止る。

長唄『都を外に捨る身は、心ぞ先に山深き、鷲尾の三郎義久、常陸坊海尊。』

ト此中鷲尾の三郎と一番年を老うたる常陸坊海尊出で來り前の人々と同じ扮裝にて、一同義經と同じやうに、土間を向いて居る。

竹本『扨武藏坊辨慶は大先達の姿にて、少し控へて後を打つ。』

ト此中辨慶、白茶繻子丸紋模樣の厚板の着付、青の水衣裁着、篠懸、銀のりんぼう、腰に大きな法螺貝を提げ、手に珠數を持ち、すべて先達の扮裝、肉色の強い顏に眼は墨を入れて恐しい扮裝、人々の最後に控へる、兩手を高く上げて威風颯爽の有樣。

一同が順を讓らうとするのを右手を上げて、●●マア先へ行けと示す。

長唄『旅路の空に今三の日も、早や入相の鐘がささ』『散らさぬ花も花の香も』『誘ふ嵐はおのづから』『花の安宅に着きにけり。』

ト是にて皆々本舞臺に來り、義經は中央正面向き、辨慶は下手上手向きに捨石に腰を打ち掛け、他は義經の後に一列に坐る、木靈入りの合方になり、皆々四邊の風光を眺め感慨無量の體。

義經『實や、現在の果報を見て、過去未來を知るとかや、義經いやしくも一命を鎌

倉殿に奉り、三歲の程の戰に、野山海邊の起き伏しに、馴れし鎧の袖まくら、かたしく隙も浪の上。』

伊勢『ある時は般に浮び、風波におん身を任せられ、又ある時は山背の、馬蹄も見えぬ雪の中に。』

駿河『海あれまさる夕浪の、立くる音や、須磨明石、憂き艱難をしのがせて。』

片岡『平家を亡ぼし給ひたる、御蹟も何時しかに、成果てたまふ御事は、いかなる因果にましますぞや。』

增尾『思ひ廻せば梓弓、直なる人は苦しみて、奸臣佞人いやましの、世にはびこつて時めけば。』

熊井『さしも賢き我君も、御身一つを置兼て。』

龜井『九會曼陀羅の麻衣、兜巾篠懸金剛杖。』

鷲尾『外には惡魔降伏の、形を見すれど心には、忍ぶ浮世の道狹く。』

常陸坊『山田の案山子里人に、心おかるゝ御有樣、神も僞ある世なるか』と愁ひの心で白を潤す、流石の勇士も皆々失望落膽の體で俯向く。

長唄『いづれも袖を顏にあて、悲嘆の涙せきあへず、其中に武藏坊』で辨慶一同の悄然たるを見て、是ではならぬと心を取り直し、獨り頷いて。

辨慶『よしなき方々の落涙かな（强く張つていふ）、神に僞りあるからは、（底く力を籠めていふ）、天に入り地に隱るゝとも、鎌倉殿もなまくら故、（早間に云ふ）、アレ氣樂や、面白や（大きく云ふ）（一寸上手の瀧の方を指して）是なる山水の、落ていはほにかゝるこそ、鳴るは瀧の水、（謠曲調にいひ）鳴るは瀧の水。（一寸一同の樣子を見て）ハ、、、、、（と心地よげに大きく笑ふ。）

長唄『諫められて人々は、暫時憂さをぞ忘れける。』

辨慶は一同に四邊の景色を見よと示す。

竹本『斯る處へ里の子が』『落葉掻きつゝ來かゝりて。』

ト此文句の中、里の子三人草籠を擔ぎ、熊手を手に持ち銘々白茶、納戸、小豆地の派手な地色の友仙模樣の着付で、上手から出て來る。

第一の童『アレを見や、（手で山伏の方を指し）山伏達が參られて、關守殿に斬られやう。』

第二の童『一昨日斬られた山伏は、憎てい顏に見えたれど。』

第三の童『昨日斬られた山伏は、愛嬌のある顏であつた。』

第一の童『ア、コレ、聲が高い。由ない山伏の噂をして。』

第二の童『關守殿に洩れ聞こえ。』

第三の童『咎められたら恐しい。』

竹本『いはゞや聞じと囁きたり。』

で里の童達はお互に耳打ちする。

長唄『判官おどろき辨慶に、それと眼配せをしたまへば』

義經愁眉を顰めて、中啓で辨慶に詳しいことを聞いて見よと知らする、辨慶は一寸頷く。

竹本『辨慶心得立ち上り。』

で辨慶は直ちにツカ〳〵と上手に進み、里の子に向ひなれ〳〵しく聲をかけ。

辨慶『こレ〳〵お身達は、此邊りの里の子よな、風を待ては木の葉を搔き、露を分けては草を刈る、いた〳〵げなる子供の業、ハテ、何がなまゐらせん（ト一寸考へて。）

ム、、幸ひ〳〵（で扇に眼を着け）是は城殿の扇とて都の名物（で伊勢駿河が所持の中啓を受取り）イザ、一本づゝまゐらせう。』

ト三本の扇を右手に持ち、里の子達に見せびらかす。而して里の子に投げてやる、子供は嬉しさうに拾ひ上げる。

竹本『ばらりと散らせば我先と、奪ひ取り勝して悅びけり。』

辨慶中央の松の老木を見て。

辨慶『サテ、此の松は由ありげなる木ぶしぢやが、何と云ふ名木ぞ。』

第一の童『これこそは、北國に隱れのない安宅の松。』

辨慶『ナニ、是が聞き及んだる安宅の松とか、シテ御身達は此邊より、奥州平泉に通ふ、近道ばし知つたらば。』

辨慶は右手で招き、自分を指す。

竹本『敎へて呉れよとすかされて、扇に馴染む風の子や』『わらんべいどもは打ち解けて。』

第二の童『是から奥への街道は、上道中道下道とて、三筋ござる。』

辨慶『ム、、シテ其の上道とは。』

第三の童『其の上道は、北國大名の登り降り、笠を脱げ、下馬せよと、泊も自由でないとのこと。』

辨慶『シテ、又其下道は。』

第一の童『其下道は越後路の舟の上、寺泊り九十九里。』

振りになり、第一の童踊る。

竹本『のつたり蒲原八十里、かするさが岳、彌彦の峯。』

第一の童『白山降しが吹く時は、佐渡が島へ吹き拂はれ、出雲島へ吹き戻し、一年も二年も漂ふと云ふ咄し。』

辨慶『シテ〳〵、其の中道と申すは。』

第二の童『其の中道は此の道筋。』

振りになり、第二の童踊る。

長唄『いちふりじやうど歌の秋、親知らず子知らず、比丘尼ころばし、こうしなげ』

第二の童『音に聞ゆる難所なれど。』

第三の童『道程近しといふことは、陸奥通ひする人に、常々聞いた物語り、サリながら、此處に一ツの大事がござる。』

辨慶『(一寸乘り出し)シテ〳〵、其大事とは。』

第三の童『判官殿主從合せて十人、山伏に姿を變へ、奥へ下りたまふとて、鎌倉殿の御錠にて、街道筋に關を据ゑ、山伏達を嚴しい御詮議。』

第一の童『此處の地頭は名にし負ふ、富樫之介家直殿、安宅の關を承はり、●●アノ松原の外れには、亂杭逆茂木引通し。』

第二の童『關の戸堅くさしかため、繪圖に合ふたる山伏は、首をぞ斬つて懸らるゝ。』

振りになり、第二の童踊る。

長唄『色が白うて猿眼、向ふ歯少し出でたるは。』

第二の童『判官殿とて、一段高く懸らるゝ。』

第三の童『色黑々と頬骨高く。』

振りになり、第三の童踊る。

竹本『眼の光るは武藏坊、日本一のあばれものと。』

第三の童『猶も嚴しく懸らるゝ。』

第一の童『一昨日三人、昨日は二人、其前とても毎日に、五人七人山伏の、斬られぬ日とてはござらぬが。』

第二の童『旅の衆には語るなと、近郷おふれが有たけれど、扇の御禮に物語る。』

第三の童『ことに大勢一所に關所へおかゝりあるならば。』

第二の童『一人とても命はござるまい、はや〳〵後へお歸りあれ。』

童一同『先達どの。』

ト云ひ捨てゝ互に頷き、籠を負ひ、熊手を手に持つ。

竹本『さらば〳〵と草籠肩に引かけて、打ち揃ふてぞ歸りける。』

で童一同下手へ行き、一寸上手を見て、右袖で顏を隱し、大きく上手へ廻つて下手に去る。

長唄『里の童の物語り、聞くより人々胸騷ぎ、一期の浮沈此の時と、呆は果てゝ佇ずみたり。』

で辨慶は里の子等の後姿を見送り、●●●ジット浮かぬ面色にて上手の義經と顏を見合し、困つたことになつたといふ思ひ入して俯向く、合方のメリヤスリになり。

義經『扨は道すがら聞きしに違ひなかりしな、東海道北陸道船路山路に關を据ゑ、探さるゝ此の義經、天地に網を張られたり、遁れも果ぬ運命にて、生中に身を苦しめ、恥をさらすも口惜しく、神佛も見捨てはてたまう義經に、主從の誼を立つる此の志如何なる世にか忘るべき、七生までも同じ世に、生れ合つて伴なはん●●●イザ此の上は義經が首打て鎌倉殿へ見參に備へ、たゞ追善には梶原が首斬つて、我墓に手向けてたべ。』

義經はツカ〳〵と前へ出で坐り、天を仰ぎ、はふり落つる涙を拂ふ。

長唄『是までなりと御佩刀に手をかけて、御自害と見えければ。』

歌の文句通りの科がある。

竹本『辨慶是はと縋り付き、其他の人々も、皆一同に立ち騒ぎ。』

辨慶は駈け寄つて義經の手を押へ、一同は立ち上つて氣色ばむ。

伊勢『贋山伏に姿を變へ、世を憚るも我君を御代にあらせん爲なるに。』

駿河『御生害とあるからは、關守は恐か鎌倉殿をも、何かあらん。』

片岡『關押破つて鎌倉へ下り、梶原親子を打つて捨て。』

鷲尾『谷七郷を斬散らし、鶴ケ岡の拜殿に、膝をならべて腹かつきり。』

増井『我君を守り召されぬ正八幡に。』

一同『面打てせん。』

長唄『イザ打立たんとばらりと立つ。』

一同刀に手をかけ氣色ばむ、辨慶は苦々しき體で、

竹本『辨慶眼に角を立て。』

で辨慶は一同に靜れと眼顔で叱りつけ。

辨慶『ヤア物に狂ふか方々、若き者共騒ぐとも、善い年の兼房血も涸て、智惠まで涸れたか、(ト吐鳴りつけ)力んで善くば去年の夏、(早間にもどかし氣にいふ)ナーゼー(引張る)腰越よりカーヘーリーしぞー(强く云ひ放つ)』

一同は合點して差控へるので、義經の方を見て一寸氣を替へ、恨めし氣に白を潤まして、

辨慶『我君も我君、(强く押へる)本意も遂げず御腹めし、心を盡し身を碎く、我々共が忠節を、水の泡となしたまひ、一騎當千の武士共、犬死せよとの御心か、よし思し召し詰めたまで、武藏を初め八人の者ども、御手に懸けられ首を刎ね、其のうへはトモーカークーも(聲を潤まして引張る)』

竹本『世に落ちて淺ましや、御心まで眩みしかと、涙を浮べて戒むれば。』

で辨慶中腰のまゝ、右手を地に突いて、首を右から左へと動かし、義經と顔を見合し、體を顫はして泣き、地り兼て横向きに兩手を突いて平伏する。

長唄『君を始め、鬼を欺く人々も、衣の袖をぞ濡らしける、判官涙を拂ひたまひ。』

歌の文句通りに科があつて、一同は後の方に坐り、義經は元の捨石に腰打ち掛け、辨慶も安堵して下手に控える。

義經『辨慶が言葉實に道理、とは存ずれど、此の義經が身の上に、憂き年月の如月や、下の十日の今日の難、遁るゝ道もつきはてたり。』

辨慶頭を上げて。

辨慶『傳へ聞く、漢の紀信は一命を投げうつて、楚の强者の圍ひをとき、高祖を救ひ奉りしとかや、(一寸一同の方を向いて)いづれも是に待ちたまへ、辨慶一人關に向ひ、南都東大寺の勸進なりと僞つて、富留那の便に關守が、心を慰め說きすかし、仕了せたれば(一寸考へて)ム、、喜びの貝を三度吹き立つべし。』

義經『若し仕損ずる其時は。』

辨慶『若し仕損じて打たるゝか、搦め捕らるゝ其時は、名殘りの貝を只一聲、立て合圖を致すべし、それを辨慶が最後なりと思し召して(愁ひの心でいふ)何地にても御身を隱し御武運の、開く時節を待ちたまへ。』一寸頭を下げる

辨慶『前途を折るではなけれども、九死の中に一生を、求むる程の危き業、たとひ名殘りの貝を聞くとも、人々かまへて辨慶が不便なり、朋輩の義が立たぬナンドト(一寸下手を見て)早まつて關所へ駈付け、其爲に君の御身に過ちあらば。』

辨慶は一寸頭を下げ、胸に手を置き。

長唄『生々世々の恨みぞや。』

辨慶『必らず共に辨慶が、吉左右を待たせたまへ。』

辨慶は男泣きに泣き、恭しく平伏する。

義經『其志は過分なれど、辨慶一人關所に向ひ、過ちあつては容易ならず。』

辨慶は感涙に咽びながら、漸く顔を上げ。

辨慶『其の御懸念には及び申さぬ、心を決して向ふ上は、首尾能く關を云ひ作らへ喜びの貝の音を必ず立てゝ、お聞きに入れ申さん。』

義經は其忠義の厚いのに感心し、併し早まるなと右手を輕く押へて注意する、

辨慶は大丈夫と云ふ心で、右手で胸を叩き、義經に辭儀をする。

長唄『勇んで出づる辨慶も心の中は二ツカゲ。』

辨慶は立ち上り、右手を上げて一同に後事を賴み、ツカ〳〵と上手へ進む。

竹本『若しや關所を仕損ぜば（で止り）、此の世に君を見納めかと、見ぬ顔しながら振返り。』

辨慶はジリ〳〵正面を向き、●●●ハタト下手の義經と顔を見合せ、氣味合になり、

堪り兼てバタ〳〵と平伏する。

竹本『關を指して急ぎける。』

辨慶、義經は互に別れを惜しみしが、やがて辨慶氣を取り直して、靜に辭儀をしてツカ〳〵と上手へ入る。

義經は心配氣に何時迄も其後姿を見送つて居る。

長唄『判官も見送つて、或は勇み或はしほれ（で判官愁然として正面を切る）肝を冷せる主從が、地獄の上の一足飛び、のるかそるかの境にて、薄氷を踏む心地せり。』

判官は後向きに泣き上げ、氣を取り直して正面を切り。

義經『イカニ方々。此期に臨み、賴む處は神明佛陀、ひで〳〵冥護を仰ぐべし。』

と祝詞になり、義經を眞中に、四人づゝ左右に幷ぶ、判官は上手の瀧の水で口を注ぎ。中央に突立ちて。

義經『謹請日本六十餘州。大小の神祇、諸天神。』

常陸『別して岩清水の正八幡。』

増井『鞍馬の大悲多門天。』

義經『願くは關守が心に入れ替り、武藏が心身安穩に、十人の主從左右なく、關を通したびたまへ。』

と一同珠數を爪繰つて祈る、義經は腰を屈めて一心不亂に心の裡で何か念じて居る。

長唄『普門品打ち上げ〳〵遊ばせば、思ひ〳〵の守り本尊。氏神産神呼び出し、般若心經金剛經、或は眞言祕密の咒、不動の慈救の偈、千本の陀羅尼くりかけくりかけ、一心に祈念ありしは、尊くも又凄じく覺えたり。』

義經は珠數を兩手で堅く引張つて不動の姿勢。他の者一同と勤行の體よろしくある。

竹本『谷の水音、松ふく風も貝の聲かと耳聳て、唯一時を待つ程も、千年も經る思ひにて心をすます折こそあれ、山を響かす法螺貝の風に手繰つて聞ゆれば。』

長唄『スハやと人々色めきて。』

で一同立上り聞耳を立てる、此内上手の奥にて、法螺貝を聞かせる。

常陸『一聲吹かば名殘りの貝。』

鷲尾『三度吹かば喜びの貝。』

長唄『後を聞けと耳を澄し、彼方の空を眺めても、只一聲の跡もなし。』

皆々落膽する。

義經『サテハ名殘りの貝なるか、モハヤ浮世も是迄なり。』

口惜しさうに云つて、上手へ駈出すと、常陸坊が前から金剛杖で道を遮ぎり止める。

常陸『コハ口惜き御事かな、辨慶が詞はや忘れたまひしか、御身命を全うして、本意を遂げさせたまふこそ、大將軍とは申すなれ、海尊御名代に駈付て、辨慶と一所に討死いたさん。』

義經『いやとよ、義經が世を忍び、時節を待たんと望むも、全く我爲ならず。附從ふ者共を、一國一郡の主とも仕たさ爲なるに、八島にては嗣信、吉野にては忠信が、我に代りし討死さへ、何ぼう今に殘念なり。辨慶に限らず九人の方々を、一人たりとも失はゞ、義經生存へ何かせん。コヽ、離されよ。』

長唄『離せ〳〵とのたまへば、常陸坊も力なく、思ひ切つたれば、鷲尾龜井皆々一同に聲を揃へ。』

一同意氣込む。

鷲尾『斯く迄御心使ひする上は、一足たりともたぢろかじ。』

龜井『關の扉を枕とし、骸を幷べて討死なし。』

伊勢『死出の山路の御供して、名を北國に。』

八人『殘すべし。』

義經『方々の決心義經が、滿足是に過ず、イザ打ち立たん。』

長唄『勇みをなして主從が、關路にかゝる勢ひは。』

義經金剛杖をトンと突いて、グット上手を睨む。

竹本『子路が石門、楚の鴻門、閻魔の廳の鐵門も。』

長唄『踏み破るべく。』

竹本長唄『すさまじく。』

カケリになり一同勢ひよく上手に入る。

後知らせにて、此道具廻る。

安宅の關打の場

本舞臺四間の間、中足の二重廂、椽側附き。正面銀地の襖。軒には幕を打廻し、て高く絞り上げ、二重に熊の皮を敷き、太刀掛に富樫の太刀を懸け、料紙硯箱を其側に置く。

平舞臺上下共に關所を設け、其外には逆茂木を引廻し、凡て安宅の關の體。富樫介家直、直垂、烏帽子姿にて指添を插し、扇を側に置き、椽側中央に居合腰に坐し、卷物を繰擴げて凝視めて居る。

武藏坊辨慶は篠掛の上より後手に繩を懸られ、下手に無念さうに俯向いて居る。番卒、源内平内藤内橘内の四人、いづれも番具足、太刀附にて辨慶の左右を固め、其他番卒多勢上下兩手に分かれて警固の體。

富樫『イカニ客僧、斯く露顯の上は裏んで詮なし、我こそ武藏坊辨慶なりと、明らさまに白狀召され。』

卷物を卷納めて屹と云ふ。

辨慶『これは聞えぬ關守の問狀かな、辨慶にもあらぬ此法師がいかで辨慶なりと申し得べきや。』

辨慶は上手を向いて澄して居る。

富樫『ヤア澁太き賣僧が申條、ヨシ、白狀せずば此處にて誅すべきか如何に〳〵。』

辨慶『言語同斷、斯る處を通り合したるが身の不肖、ムン此の上は力及ばん、尋常に誅せられん。』

辨慶は正面を切て嘯く。

竹本『觀念の眼を閉ぢ、泰然たる折柄に、主從息を切つて駈來り、番所の庭に突立つて。』

ト此文句の内、東の花道より義經に續いて家來八人の山伏意氣込んで駈來り、關所の内に入つて辨慶の此體を見て、今更に犇く。辨慶は又早まつた事を爲て呉れる、困つたものだといふ腹でグット義經を睨む、義經もそれと察して、釋杖で一同を支へながら、屹と富樫の方を振向いて。

義經『東大寺勸進の山伏、奉加附かずば附かぬまで、何科あつて此先達を召捕へ、法體の身も憚らず、粗忽の繩を懸けられしぞ、本地本山より鎌倉殿へ訴へ出で、

僻事と相成らば悔て歸らぬ富樫殿、後日の罪科笑止なり、イデ先達の繩解かん。』

義經は下手の辨慶の方へ行掛る、番卒が遮る。

長唄『立寄り給へば番の者、一度にばらりと取廻す。』

義經は意氣込む、辨慶は堪り兼て左足を踏出し、控へて呉れいと眼で知らせる。

竹本『南無三寶と辨慶獨り、人目の隙に判官を睨めつけ〳〵心の中は早瀬川。』

辨慶は未だ義經が心付かぬので、四邊を見廻し、四方に心を配りながら、眼で控へて居よと指圖する。

長唄『もまる〻浪の川柳、空眠りして居たりしが、富樫の介聲を懸け。』

辨慶は周圍の人達を誤魔化す爲に俯向いて、空眠りをする。富樫の眉はキリ、と釣上がる、眼鋭く義經をハタと睨み。

富樫『ヤレ知れたる山伏かな、此一卷は彼の法師が勸進帳と名づけて、天も響けと讀み上げしを、奪ひ取つて披見すれば、是見よ(卷物を擴げて示し)勸進の趣意は

一字一點もなき往來の卷物、殊勝氣なる聲をして、それつら〳〵おもん觀ればなど〻、(富樫は鋭く激しく云つて、グット世話に碎ける)誠らしき文句を列べ、佛を僞り人を欺く不敵の曲者、實にそれも理り(沈めて底く分別らしく云ひ)(間)彼こそ西塔、武藏坊辨慶(一段高く云ふ)鎌倉殿の御錠に依て、搦め捕るは富樫介がよも僻事ではあるまい。(早間に强く云ひ放つ)』

義經『ムー、彼の先達を辨慶なりとは、色黑く背高く、似たるを以ての故ならんか、安宅の關には烏亂の判斷。それとも又正しき證據、あつての事なるか。』

富樫『(卷物を卷納めながら)ムハ、、、、(押へてゆるく引笑ひ)天下の沙汰に批判の掟あるべきか、辨慶が繪圖、是を見よ。』

竹本『一軸サット押披き。』

富樫は手文庫の中より繪圖を取出し、兩手で右の方へ突出して擴げ、ジット凝視めて。

富樫『面付き、眼ざし、手足の樣子、丈は六尺二寸、左の眼尻の黑子まで、寸分違はぬ確にソレと、（思入れ）ナント遁れ難き慥な證據であらうがなア。』

義經『辨慶が人相繪圖のあるからは、判官の繪圖も候はん、事の起りは判官一人、繪圖に合せて搦め取り、アノ先達を助けられよ。』

富樫『イヤ其の繪圖までも候はず、さいふ御邊が判官殿よナア。（强く早間に屹といふ）』

富樫は刀に手を懸ける、双方とも一同意氣込む。

長唄『スワ我君の一大事と、各々太刀に手を掛て、此處を先途と詰寄れば。』

竹本『辨慶ヅヽと寄つて、判官を俄破と踏倒し、腰の番をどう〳〵、どう〳〵と踏除け〳〵、ハッタと睨み。』

ト此内番卒山伏を取卷く、山伏皆々斬死と覺悟の體。辨慶文句の通りの動作があつて、辨慶は義經を腹では撫はりながら表には荒々しく、右の足の下に踏み据ゑ。

辨慶『ヤア此な剛力上りの若輩者年かさ達を差置いて、最前よりの差出面、にくし憎しと思ひしに、義經の繪圖に合せ、似たる者を搦めよとは、（四邊に聞えがしに荒々しく高く云ひ）己れに似たらば（義經にあてゝ恨めし氣に謂ひ又氣を替へて）何とする。（高く四邊に聞えがしに云ふ）』

（調子を替へて、沈着いて底に力を入れて云ふ）此法師も、辨慶程にあらずとも、イザと云はゞ五人、三人掛つても、搦めらるゝ者ならねど、（又調子を替へて、グット沈めて悲し氣に）己は元來孤兒の、父もなく母もなく、一人の兄弟子に見――離――され（白を潤める。）逍遙ふ體が骨髓に通つて、不便さに、（白を引張る）行末を安穩ならせんと、鬼神と云はれし人にさへ、指もさゝせぬ此法師が、雜人輩に組み敗かれむざと繩には（思入れ）掛つたり（潤める）某が掛らねば、己に掛る、此繩目。（强く無念さうに云ふ。）

辨慶は警められて居る縄を見て、次に義經と顔を見合せ、涙のはふり落つる顔を仰向く。

竹本『たとへ千筋萬筋でも、手足の縄は解けば解く。』

辨慶は首を下から左右に振る。

辨慶『名に掛つたる一筋は、子々孫々まで解けざるぞ、(激しく勵ますやうに云ふ)諸國諸道を勸進し、大伽藍再建の、大願を(強く云ふ、)忘れたるか(うるめて謂ふ)エー罷り立て剛力奴。(叱るやうに云ふ)』

長唄『のう同行の客僧達、彼奴引立て歸られよ。』

辨慶は文句の通りの腹で上手の者に眼で指圖する。

辨慶『法師の身には主もなく君もなし、法の敎へが卽ち主君、その敎を表したる兜巾篠掛は取も直さず法師の主君。』

辨慶は下手に向つて悲しみの顔を見せまいとする。

辨慶『主君を踏たる天罰冥罰、未來の報いが恐ろしや。』

辨慶は右から仰ぎ、下を向き、首で上手へ判官を起す。

辨慶『ヤアー剛力奴、全く己を戴くに非ず、此兜巾篠掛の、主君を戴く(強く云ふて、グット氣を替へ)免させ給へ、御免あれ。』

(謝罪るやうに切なさうに云ひ、大オトシに泣く。)

辨慶は悄然として俯向く。

竹本『外に事寄せ泣きければ、八人の山伏も打しめつてぞ、見えにけり。』

辨慶は顔を漸く上げる、義經も濕める眼で辨慶の方を見るハタト雙方見合し、氣味合になり、辨慶堪り兼ねて義經の方へ行かう、として居合腰になる。番卒が後から取縄を曳く、辨慶どうと後に倒れる。

長唄『岩木にあらぬ富樫之介、御痛しさ肝に染み、何にも助け通さんと、暫時心を碎きしが、番所を飛び降り辨慶が、警めの縄引解き。』

富樫は思入れあつて、輕く涙を拂ひ、腹の内で泣く、一寸考へて刀を側に置き

ツカ〳〵と下に進み。

富樫『鳴滸がましき山伏共。(辨慶の繩を解いて下手に立ち)己等判官辨慶と、名乘らぬ計りに作りなし、此富樫をたばからうと巧みしよな、鎌倉殿の御掟を受け、關を固むる某が、實否を知らであるべきか、(一寸聲を底めて)察するに己等は此頃斬たる山伏の、恨を報ぜん其爲に、判官又は辨慶に人相似たるを選び出し、左の眼尻の黑子迄其儘に寫しなし、コリヤ辨慶よと搦めさせ、鎌倉へ引かれし上、この家直に不覺を與へ、腹を癒さんとの計略よな、扨も憎くき不敵の似者、五十日も(意味を込めて長く引く)百日も關所に繫いで浮目を見せ、泣面させんと思へども、誠の判官辨慶を、詮議の妨げなす己等、留め置いて何かせん、サア通れ通れ、キリ〳〵此の場を通りをらう。(鋭く云ひ放つ)』

長唄『通れとこそは呼ばゝつたれ、承つて番卒が颯と開きし關の扉や、人々胸は暗路に、月の出でたる如くなり、判官氣色に顯はし給はず。』

一同は事の意外に呆れる、中にも判官辨慶は驚いて、二重に居る富樫の方に詰め寄り。

義經『イカニ富樫殿、誠の判官辨慶ならねば、助けられても嬉しからず、先達に繩を懸けたる粗忽の振舞、山伏道の作法にて、屹と申分ある筋なれど、俗人に對し問答無益、通して後悔召さるゝなよ。』

番卒源平『えゝ、雜言吐かずと。』

番卒一同『早く通れ。』

長唄『心は先に急げども、足先はゆう〳〵と、行過ぎ給へば下部の雜式。』

富樫は下手俯向いて考へて居る、判官始め九人の山伏下手の方に通る、番卒平内、駿河次郎が笈に突當り。

平内『ヤアー、此笈には鎧有りと覺えたり、止りをらう。』

長唄『スワヤと人々立騒ぐ。』

山伏一同附際で上手向いて意氣込む、辨慶は仕損じたりとは思へど、釋杖を以て人々を支へる、一同瞬きもせず、疑ひと危みの眼を以て睨み合ふ、獨り默然として居た富樫。パタト胸を躍らせながら、態と眼を怒らせ、語氣荒らく。

富樫『サテ企んだり〳〵、判官殿に似せんとて鎧迄入れたる此行先には井左衛門、上田の兵衛が固めたる、二ケ所の關あり。是にても又判官顔して、關守を嬲らんは必定、憎さも憎し(思入れ)ソレヨ、此手判を渡して呉れん。』

竹本『關所の切手取り出し。』

富樫は切手を右手に持ち。

富樫『此手判を渡し置かば、何づ方にても己等が、判官辨慶と欺つても、いつかに咎むる者もなし、(底く四邊の者に氣を兼て、ズット判官主從に云ふ)サア疾く(一段聲を張上げて)關を通りをらう。』

竹本『關所の切手投げやれば、辨慶悅ぶ景色もなく。』

文句の通り科あつて、

辨慶『無益の事にて日の暮まで過せども、一紙半錢の勸進にも附かぬとは、サテ〳〵佛果を願はぬ、吝い關守ムハ、、、、。』

辨慶は釋杖で札を掻き寄せ、左手に札を持ち、一同に早く行けと腮で示す。

四人『笑ふて通る關の扉に、虎の尾を踏み、毒蛇の口。』

竹本『遁れて越ゆる主從の。』

と此文句の中に、山伏皆々關の門を通つて、花道に居并ぶ、文句の切れにて、

富樫は感慨無量の體にて後姿を見送り。

富樫『智勇無雙の忠臣に、非道の繩を懸けたる罪科、弓矢八幡免させ給へ。』

富樫は天を仰ぐ、眼を塞いて何か念じて居る。

竹本『其一心の矢先には。』

富樫は立ち上る、辨慶等と顔見合す。

長唄『敵とふものはなかりけり。』

二重にて富樫は傍に落ちて居る、辨慶を警めたる縄を拾ひ上げ、心で祈る。幕を引く。

花道には判官と辨慶は顔を見合せ、辨慶はイザ行き給へと右手を上げて指圖する。

是にて、判官始め八人の山伏悠々と揚幕に入る。

辨慶一人後に殘り、揚幕を見てモウ大丈夫と云ふ心にて、舞臺の方に向き直り珠數を取出し、富樫の冥福を祈る。

辨慶『南無摩利支天尊四大天王、諸天善神、富樫介が武運長久、冥加あらせ給へ。』

九字を切つて、喜びの法螺を三度吹き、立ち上つて杖をトント突き、揚幕を見込んで兩手を張り、大見得。

右手に杖、左手に珠數を持てる手を替る〳〵に振り、前途に氣がかゝる心にて揚幕の方に氣をかけ、又關所の方からは威張つて歸るやうに見せる爲に右足を屈め、左足を張つて飛六法やうの形にて囃子につれて大きく引込む。（幕）

新曲『紅葉狩』の型

更科姫　實は鬼女　市川高麗蔵　　従者運八　市川左喜之助
侍女雌氷　中村又五郎　　同八内　市川ぼたん
同田・毎　中村明石　　山神　澤村宗之助
平維茂　市川左團治　　侍女大勢

下り羽の鳴物で幕開くと、平舞臺正面遠山の書割、下手に蜿々として老松聳え其後の岩角より松ケ枝蔓延る、一面に紅葉の釣枝、すべて戸隠山の景、上下に長唄と常盤津の山臺居並び、長唄連の上手に竹本連の山臺がある。

常盤津『信濃路に、其名も高き戸隠山も、時雨に染なして。』

竹本『錦彩る夕紅葉。』

長唄『日影梢に照りそひて、四方の景色をますら雄や。』

竹本『頃しも、長月末かた、世界も平の維茂は従者を連れて。』

常盤津『紅葉狩。』

で平維茂に従者運八、八内の兩人が附添ひ花道より出る。

控へ一聲をさかせる。

長唄『矢たけ心の梓弓、入野の草の露分て。』

常盤津『行衛も遠き山蔭の嶮敷道を辿り來て。』

で七三に止り。

合ひ方止る。

維茂『草木心なしと云へど、かならず四季の時を違へず、春は花咲き秋は又、梢を染むる山紅葉、かへる家路を忘るゝぞ。』

運八『仰せの如く一圓に、西も東も眞赤にて。』

八内『見事なことにござります。』

維茂『見れば彼れなる木のもとに慢幕を打廻し、中に數多の人かげ見ゆるは、いづ

れの誰か知らぬ人とて、馴々敷其方參りて、何人なるか其姓名を尋ね參れ。』

運八『畏まつて御座り升。』

と一寸維茂に會釈して先きに行く。

竹本『木の間に張りし幕張りの、外もへ從者は行みて。』

で皆と本舞臺に來り、維茂と八内は下手に、運八は中央上手に向き、

運八『幕の内へ案内申す。』

と云ふ。

常盤津『おとなふ聲に侍女は立ち出で。』

上手から腰元數名出て來る。

奥女中
お文『御案内とは。』

腰女『何御用で御座り升る。』

運八『卒爾ながらあれに御出の御方はいづれの御方にござります。』

お文『是はやんごとなき御方にて、此戸隠の紅葉々を、御遊覽遊ばして、あれにおいでゝござり升る。』

侍女一『見れば烏帽子狩衣にていかめしき御形なれど。』

侍女二『何所やら優しい殿御振。』

お文『していかなる御方に御座り升。』

運八『手前主人は、此近國に隠れなき余五將軍維茂也。』

お文『サテハ豫々承はりし將軍にて御座りしか。』

侍女一『折角のお尋なれど、今日は忍びの御遊興、御名は明し申されず。』

侍女二『此由お傳へ下さりませ。』

運八『承知致しました。』

と答へて下手に戻る。

竹本『從者はこなたにたち戻り。』

で下手向き畏つて。

巡八『只今あれにて尋ねし所、さるやんごとなき御方にて御名は明し申されずと、左樣申しまして御座り升。』

維茂『汝が申すやうすでは、定めし高位の御方ならん、其さまたげにならぬやう、忍びて此所を通るべし。』

従者一人『畏つてムり升。』

長唄『いざや忍びて通らんと、道を隔てゝ過ぎ給ふ。』

で維茂に従つて従者も下手に歸りかける。

上手奥に聲あつて、

侍女『なう〳〵暫し御待ちあれ。』

と呼び留る、維茂主従立止つて上手を向く。

竹本『立出る。』

で更科姫は吹輪に花櫛を挿し、紅地流水に散り櫻の着付、白襟緋縮緬の繻絆、白茶饅頭菊の帶、鬱金の扱帶着付と同じ色、同じ模樣の襠、白足袋赤の鼻緒の草履、總の附いたる女扇を持ち、侍女雄氷に手を取られながら恥しき科にて出る、侍女一同續いて出る。

長唄『紅葉に優る色絹の、色香こぼるゝ風情にて。』

で下手向き立止り。

更科姫『賓人しばし待ち給へ。』

維茂『待てとおとゞめなされしは、やんごとなき御方なるか。』

更科姫『女子の身にて此樣な深山路へ、深く入つるは。』

で、スグ長唄の方へ取つて。

長唄『時雨に染る紅葉々の、いともすぐれし此色を。』

になり更科姫は紅葉の景色に見惚れて居る心で、ズート扇を袖にあてゝ、左右

を見て上手から下手に廻る。其途端に維茂に見惚れてる形で三足程出て行つて右の足が石に躓いた體で合引にかけ、恥しさうに扇を弄そんで居る。

更科姫『一ッまとゐに御らんあれ。』

維茂『折角の仰せなれど、男女七歳にして同席せずと世の諺、御縁もござれば又重ねて。』

竹本『すげなく行くを。』

で維茂は下手を向いて戻らうとする。

竹本『引とゞめ。』

で、腰元が下手へ廻つて、

一同『アモシ。』

と止める。

常盤津『ふり見ふらずみむら雨の、雨の舍にあらざれど。』

竹本『一樹の蔭に立寄つて一河の流れ汲む酒を。』

長唄『見捨給はじ盃を、手に取り上げて給はれと。』

常盤津『いはぬ色なる女郎花、袖にすがりて、とゞむれば。』

で侍女碓氷とお文が維茂にからんで止める。維茂は一寸當惑の體で、

維茂『左樣仰せ下さらば是にて、いこひ申さん。』

碓氷『維茂樣が共々に、此の山路と紅葉の景色を、御遊覽とあるからは。』

田毎『あれなる御席を是へ移し。』

碓氷『酒の調度を。』

岩橋『少しも早ふ。』

侍女一同『畏りました。』と立ち上る。

常盤津『さゞめき立つて毛氈をこなたへ敢けば腰元が、手に手にはこぶ酒道具。』

で社天の合方になり文句の通りの科があつて。

侍女『サア〜〜これへ、御進みあれ。』

維茂『仰せに從ひ御免下され。』

と一寸會釋して上手に通る。

常盤津『岩木ならねばむら萩の、風にしたがふ姿にて、心弱くも引とめられ。』

で維茂は上坐、其次に更科姫、其後に侍女一同、下手に從者二人と云ふ順に着坐する。

侍女『いざ〜〜お一ッ御過しあれ。』

長唄『侍女が進めに取り上ぐる、人の情の盃も。』

竹本『數を重ねて心とけ、いつか隔も中垣に、むすぶえにしのひとかげや。』

で、侍女が姫より先きに盃をさし、酒を注ぐ。姫は呑んで維茂に指す、維茂盃を手にする。

常盤津『野邊吹く風に。』が、竹笛に一聲の合方で侍女の踊りが一くさりある。

運八『是は〜〜、御主人にはさのみ御酒を上らぬに、よほど。』

八内『御めいていに御座りますな。』

維茂『なみ〜〜ならぬ銘酒故、思はず酔を覺えしぞ、是にておゆるし下さるべし。』

侍女『殿樣がおいやなら、御家來樣サア〜〜一ッ召し上りませ。』

と下手の從者の方に、銚子盃を持て行く。

運八『酒と聞ては目のない我々。』

八内『然らば頂戴致すで御座らう。』

竹本『大盃になみ〜〜と、つぐを遲しとのみほして。』

で二人共酒をのんで酔態のこなし。

常盤津『いつか亂るゝ竹の葉の、ふしもをかしく唄ひ出で。』

で運八が飛び出して、扇を持つて踊る。

かさい念佛、渡り拍子、驛鈴、笛、禪づと、水の音の合方になり。

竹本『木曾の掛橋、丸木を渡し、下は數丈の早瀨の川に。』

長唄『見れば怖さに、怖さに見れば、なんと信濃の、難所の橋も。』、

と瓢欣に踊つて引込めば代つて、八内が浮れて杖を持て盲按摩の科で踊る。

維茂『やんごとなき御方の前にて、無禮の振舞控へ居らぬか。』

と叱る。前の合方止る。

逦八『恐れ入つて。』

逦八と八内『御座りまする。』と恐縮する。

侍女は維茂の手にせる盃に酒を注がうとすると、

維茂『折角の御進めをもどくも返つて失禮なれば、頂戴致す其替り、なんぞ此場のお肴を。』

侍女『其御肴には女御樣、一トさし御舞遊しませ。』

更科姫『皆の者の進めなれど、妾が拙き舞振りは。』

とはにかむ。

維茂『それは一段の事、是非〳〵一とさし御舞ひ候へ。』

と所望して、グット大盃を呑み干す。

更科姫は扇の總をいじりながら恥し氣にして、

更科姫『いともおもなることにこそ。』

と云ひながら立上り、(合方控へ)。侍女に手を引かれて、靜に歩いて後向きになり、襠を取る。

竹本『敗島の三ッの景色と。』

長唄『歌人が。』

で更科姫は正面に向き直り、奏樂。しようしちりき、大笛、鉦鼓、かつこ、音樂の合方になり。

長唄『霞と共に杖を引く、一ト目千本の三吉野や。』

で合方止る、更科姫は、上手から扇を指して下手にゆく、下手から扇を返しながら上手へ廻る。扇を開いて其両端を持つて上手へ、足を三つばかり入れ込んで送る。扇を両手で翳して上手へ行き後の景色を見る。

常盤津『花の盛りに准へてし、（大小をあしらふ）越路の雪のふりつみて。』

吹雪に追はれた心で後下りをする。扇を逆に取つて、上手の空を見ながらグルリと下手の方へ廻り、扇を上向けて山の形の心で、右手に翳して揚幕を見る。扇を穿めて侍女を招く、侍女碓氷下手に畏る。

常盤津『見渡す限り白妙の、あかぬ眺のはる〳〵と。』

で姫は右に扇を指して上手へ廻る。碓氷は其指された扇について矢張り上手に廻る、姫と碓氷は上下に入れ代る、姫は扇を右袖に抱へて、下手の遠くを見ながら、三つばかり足を入れ込んで送つて行く、碓氷は上手で両袖を胸の處で合して上手へ送つて行き、お互に後ずさりして、双方三足下りトンと背と背をぶつかる、姫が下手へ行くと、碓氷は前へ手を突いて下る、姫は碓氷の肩につかまつて、扇を開いて見上げる。

碓氷は上手へ出る、姫は下手へ出て、扇と手を開いて空を見て三足ばかり滑り、下手へ廻つて、碓氷と向ひ向ふ、姫は開いたる扇の両端を持てるやうに出してやる。

碓氷は其扇を受取つて、其儘姫の方に振向くと、姫は袖を持つて、碓氷と入れ違ひに、横に振りながら押して行く、碓氷は扇を前に突出して後ずさりする。碓氷が上手へ逃げる、姫は碓氷の帯を押へて三足後へ下る、碓氷は上手へ廻つて坐り、扇を上の方へ上げて極る。姫は下手へ廻つて、袖を拱んで足を入れ込み上手を見込んだ見得。

碓氷は扇を持つて、静に上手から後へ引込む。

竹本『木曾山越えて更科の、田毎に月影に、心も晴れて曇りなき、御世の鏡の鏡臺

山。』

で下手から侍女田毎が出る。姫は田毎に關はず、袖を拱んだまゝ上手の方へ送つて行く、田毎は又下手の方へ何を見るとなくブラリ〳〵と出る。是がお互ひに後を見ずに下つて來て、眞中で打合り、入れ變らずに上下に廻る。

姫は上手で、裏向きになつて月を見る心で空を見る。田毎は下手に、水の流れに月が映る心で、裏向きで下を見込む。

姫が右袖を折つて左肱を張り、右の足を前に出して、水に映つた月を見込むと下を見て居た田毎が、氣を替て空を見上げる。

姫が上手へ廻つて、又裏向きて空を見上げる。田毎は前へ左の足を出して、下を見込む。此樣な事を三度程繰り返す。

姫と田毎が向き合ふ、田毎が前へ出て坐る、姫が其後に立つ、互に上下を振向いて二三度見合ふ。

背中合せで上下から、姫は袖を振り、田毎は袂を握つて見合ふ。

姫は袖を上へ向け、田毎は袖を下へ下げ、互に袖で顏を隱す、姫は上手へ行きかけるを、田毎は下手に坐つて、姫の裾を押へる、姫は立つたまゝ上手から廻つて下手へぬける。田毎は裾につゐて廻りながら立ち上る。

姫が左袖で顏を隱して下手へ廻り、裏向きで空を見込むが止り。

田毎は右の袖で顏を隱して上手へ廻つて、右手を地に突き左の袖を胸にあて、姫を見込むのが止り、合方になり、兩人共後へ引込む。

常盤津『秋の最中も、とくすぎて、木々の梢の葉はあれど、山路は苔のなめらかに。』

どろ〳〵になり、姫は鬼女の相を現し維茂を見込む。維茂は醉ひつぶれて他愛なく、思はず曲彔から肱を落す、姫は一寸驚く。

長唄『綠りに茂る松柏の、木の間にひとり秋をしる。』

で一聲になり姫は袖を合して顏を隱し、下手へ滑つて早足に逃げ、廻つて片足

を上げて、交る〳〵扇を翳し、維茂の方へ行き、グット鬼女の心で凄い眼付で睨む。合方止り。

長唄『紅葉色増す村雨のしぐれに近きねをま月。』

で、序の幕の合方になりハット氣を替て手を大きく上げて拱み、搖つて前へ滑る。其拱み合せた手で顏を隱し、廻つて下手へ行く、袖を拱んで上手を見込んだ見得で止り。

二上りになり。

常盤津『其名所は取分て。』

で姫は紅地金砂子散らして舞扇を持つて前へ向く。

常盤津『都に多く通天の。』

で合方の止りになり。

姫は舞扇で袖を打ちながら、前へ三足出る。扇を開いて左の肩にあて、下手を見て、右の足を上手へ入れる、裏向きになつて、其舞扇を右の肩にあて〻、立身で後向きに山を見上げた形。合方になつて。

左の肩にあて〻上手の方を見て、又返して右へあげて下手の方を見て、も一つ左にやつて上手を見る、扇を取り直して左の手に袖を掴み、右の手に扇を握り構へる。六調子の合の手で足拍子を踏む。

扇を上げて出し、左の足を後へ上げながら、扇を降し、骨を返して眞中を取る、キリ〻と廻して眞中を押へて、左足を下に入れて、後へ隱して、左袖で口を隱し、足を入れ込んで空を見上げて、扇の端を左に持ち、ズーと上手へ開いて行き其舞扇をバラ〳〵〳〵と下に落し、飜しながら下手へ下る。

舞扇を右の手に取つて扇を返し、左の手にのせて胸へ持つて行き、左手に扇を返して、兩手で輕く持ち、トント極る。

又扇を返して、右手で舞しながら下手より、上手へ高く投げて左の手で受ける。

其扇を持てる左の手を出し、右の手を突いて極る。

竹本『山を望めば山姫の、手に織りなすか、唐錦。』

長唄『秋の山邊に日の入りて。』

大小の合方。

竹本『入相つぐる遠近の、里に暮るゝを恨みの山。』

常盤津『はゝその森や、木の蔭の小倉の山の、風景は。』

竹本『外に類ひも嵐山。』

長唄『嵐に散りて紅の、水を染なす大井川。』

風の音。

姫は右手で今一本の舞扇を受取り、其扇を開いて返して胸の處へやる、三足滑つて、左の扇を上げ、右の足を入れ込んで。『手に織りなすか』で扇を下に降して、元へ直して極る。右手に持てる舞扇を前と同じやうにして、前へ二つ列べて止る。

『唐錦』で右の足を一足出して扇を降しながら、出した右の足を引いて坐る。『膝づめ』三つして扇を並に持ち直して、其扇で内から拂ふやうに『ケッバイ』をして三足前へ出る。其扇を右の方に擔げて、三つ程ゆるやうに滑る。

『恨みも』でそれを捲き込んで下手へ廻り、右の足を引いて坐り、開いた右の扇を上げ、左の扇を下に前へ出して、裏向きに見上げた形。

坐つたまゝ上手へ廻り、前を向いて、兩方の手に持てる舞扇を、交る〳〵一本づゝ返して、指先きで取る。其扇を綾にして、左の手に持つ扇は内、右の手に持つ扇は、外に持ち、一寸左の肩を下げて、右の扇を内へ投げて『小倉』で取る、立ちながら、綾に重ねて、次第に後へ下り、左の扇を前へ出して右の扇を舞して胸の處にやり極る。

舞扇を二本共前へ出して眞中を取り、足を上下に入れ込んで、下から上げて一

つゞゝ踏む。

下手へ廻つて、『嵐山』で扇を一づゝ廻して、トン〳〵〳〵〳〵と右の扇を激しく舞しながら、上手へ行き、右の扇を返して上へ投げ、兩手で受取る、一本の扇を後へやり。

下手に扇を指し、上手の方へ大廻りに巡つて、別に袖で指して上手の維茂の傍へ行き、扇を前に出して、後下りに坐り、維茂を見込んで鬼女の形。

竹本『暫しまどろむ維茂に、きつと眼を付け。』

で中の舞の合方になり姫は肩を怒らせグット凄い眼付きで睨みハット氣が附いて、身體は維茂の傍へズーと寄り、遠くで顔を隱し。

常盤津『流れの元はいづく共、誰白菊の咲亂れ、汲で香を知る。』

竹本『くずー。』

常盤津『りー。』

長唄『みーづー。』

下手へ滑りながら下手に坐り、打ち上げて扇を左手に持ち、前で打つて足拍子扇を上へ掬ひ上げて、『流の元』でくゞりながら下手に廻る、それを返して上へ投げて取つて、左手を胸にやり坐つて極る、合方止る、維茂も從者共も能く寢入つて居る。

侍女『維茂樣にはまどろみ給ふか。』

姫は荒々しき男の形相にて維茂の傍に走り行き。

更科姫『アこれー。』

と太い凄い聲、風音になり。

竹本『夢ばしさまし給ふなと。』

で姫は四邊を見廻し、熟睡せる維茂をジッと見込んで、モウ大丈夫と仕澄した思入れ有つて右の足でドント高く大地を打ち、侍女を引連れ。

長唄『幕の内へぞ入りにける。』

上手に急ぎ足で、勢ひ能く引込む。風音の合方止る。

竹本『時しも空は暮れ行きて、雨うちそゝぐ夜嵐の、物すさまじさ。山蔭に鳴動なして山神が。（夜神樂の合方）假に姿をあらはせり。』

で揚幕より山神御幣を持て現る。七三に止り合方止る。

山神『なう〳〵夫にうたゝ寢なすは、實に風前の燈火よりいとも危き事なるぞ、此の山奥に隱れ住む、鬼神が夜な〳〵人を奪りて。』

振りになり。

常盤津『生血を吸ひて肉を食ひむしやり〳〵と骨までも嚙ひ裂くことの恐しや。』

竹本『お身も（大小の合方）こゝに永居せば、必らず鬼の餌食ぞや。』

で振り終つて本舞臺に來り。（山下しの合方）

山神『我は八幡大神の命を蒙り來りしなり。』

常盤津『とく〳〵起きよとく起きよ。』

と、（前の合方止る）

竹本『杖つき起せしが、熟睡なして、主從が起きる氣色もあらざれば。』

山神『善し〳〵。此の上は、土拍子どうと踏み鳴らして音にて眼を覺まさし呉れん。』

で山神は振りの内に激しく足拍子を打つ。（土拍子三保神樂夜神樂の合方）

長唄『神殿祭の庭神樂に、岩戸神樂の名殘りにて。』

常盤津『たゝく太鼓又は笛つゞみ、土拍子打つて、

『どんからこゝ。』

スグ大拍子の合方になり。

長唄『とことん。』

竹本『ぼこぼん。』

常盤津『ひゆどんちやん。』

長唄『打てど叩けどめざめねば。』

合方止る。

常盤津『山神あきれて杖を突き、後をも見ずして歸り去る。』

山神唄の文句の通りの科わつて、上手を見て鬼女が來るに驚き、足早に七三迄行き、追掛けの姿で、風音になり揚幕に入る。

竹本『夜風身にしみ維茂が、ふつと眼覺し、あたりを見廻し。』

で熟睡して居た維茂は、曲碌が横に倒れる拍子に、ハット眼覺めて、四邊を見廻し驚いたる思入れ。

維茂『アラあさましや、我ながら無明の酒に魂うばはれまどろむ内に、夢の告げ、正しく鬼神に疑ひなし、いで正體を見とゞけくれん。』

と云つて、股立高く取り、襷を手早く掛け、刀の鯉口を鳴らして、

常盤津『勢ひこんで、幕張の内をめがけて、かけり行く。』

維茂後向き上手を見込んで勇しく上手に追つて入る。

竹本『後に二人は起き上り。』

遲平『扨は、今の女御達は變化ではあるまいか。』

八内『こりやからしては、ゐられぬわへ。』

と從者はビク〳〵ものでキヨロ〳〵する。風音になり。

竹本『命有つての物種と、しどろ、もどろに逃て行く。』

從者はあわてゝ去る、山下し打上げ。

掃き舞臺(誰も居ず)大薩摩になり。

大薩摩『折しも烈しき山風に、ちりゆく紅葉に誘ふ共、逃げゆく女御をのがさじと太刀拔きかざし詰寄つて。』

で早舞の合方になり。

更科姫實は鬼女が上手から逃げて出る、維茂が小烏丸の名刀を振廻して追駈け

て來る、上下に向ひ會つて、

維茂『我にしやうげをなさんとて、姿を變しは正しく鬼神、其本體をあらはせよ。』

鬼女『汝が所持なす小烏丸の威德に依て、通力くじけ、今ぞあらはす我本體。』

やさしき姿、忽ちに、さも恐しき其有樣。

竹本『云ふ聲さへも、山谷に轟き渡りすさまじき。』

維茂『いで維茂が退治しくれん。』

鬼女『鬼一ト口に、いで食はん。』

竹本『鬼神は怒りて維茂をみぢんになさんと飛びかゝる。』

大小の合方になり。

常盤津『しやア小ざかしいと飛びちがひ。』

長唄『樹々の紅葉も炎となり、古木木の葉もさら〳〵〳〵。』

合方になり。

維茂は山形に斬つてかゝる、鬼女は被衣を被りながら上手へ入れ替り、被衣を維茂の方へ投げ捨て、赤毛の鬚鬼の隈。白衣、緋の袴、白足袋鬼面の惡相を現し、後へ鬼飛びに飛んで毛を握つて大見得。維茂が山形をするので、鬼女は入り替る。

維茂が大きく廻つて、後に出で刀を振上げる。鬼女は、下から覗き込む。

鬼女は下手へ鬼飛びをして、上手を見て、又維茂が山形をするを、鸚鵡返しに

鬼女は上手へぬけ、鬼飛びの見得。維茂が斬つてかゝるを下手へ抜けて、毛を振り維茂を上手へ押して行く。

維茂上手から斬つて出る、鬼女裏へ抜けて、維茂の肩に手を掛け引き戻す、毛を振りながら前を通つて入れ替る。維茂斬つて出る。鬼女は裏へ抜ける。入れ替つて維茂を据ゑて、後に立つ、維茂は太刀を下から出し左の手を胸にやり見上げる。

常盤津『業通自在の變化のはたらき。』

で早舞の合方になり。

早き合方につれて、物凄い氣分が舞臺に浮ぶ。

鬼女は飛び去つて、前後左右に毛を振つて、トゞ兩手で毛を握つて大見得。

鬼女は紅葉の枝を取つて投げ、又一本の紅葉の枝で、維茂の小烏丸と天地合はして合方「カラウス」になり、出たり引込んだりして、くる〳〵と轉し、枝を取られて毛を振り、裏表で入替つて、維茂は上手で斬下さんとする構へ、鬼女は下手から横向きを抱へて、右手を人さし指と中高指、紅さし指と小指と密着け鬼の手の形で掴まつて、維茂の胸の處へ顔をつける。

鬼女は維茂を上手へ突倒して、仕掛けの火を咬へ毛を振つて維茂を上手へ送つて、鬼女は腰を屈めて火を吹く。どろ〳〵になり。

維茂は眼が眩んだ心で滅多矢鱈に斬り捲り、キバに落ちて悶絶する。どろ〳〵

止る。

鬼女は鬼飛びで、下手で大見得。ゆつくりはたらきの合方笛の這入つた沈んだ鳴物。

鬼女はソツト右足から上げて維茂の方へ忍んで行き、三足前へ出て、維茂が右手に差出して居る小烏丸の名刀が出て居るので、其威光にけられて下手へッ、と逃げて附際で、下手より、右の足を出して、左の膝を突いて、兩手で毛を握つて上手を見送る見得。

忍びながら、維茂の傍へ行き、手を前へ下げて裏へ廻りながら、反つて後から維茂の顔を覗き込んで上手へ出る、上手から一食にせんとすれば、又名刀が出るので、恐れて上手から下手を見込む。

鬼女は維茂の傍へ來て、上から維茂に手をかけ、下手へ廻つて覗く。

大ドロになり、悶へ苦しみ、手をモガ〳〵と動しながら下へ下げる、足を入れ

込んで狂ひ廻り、上から下手へ廻り、毛を振りながらグル〜〜〜と廻る、終ひに毛を振りながらギバに落ちて悶絶する、合方止る。

竹本『しばしはいどみたゝかひしが。』

大小の合方となり。

維茂氣がついて、鬼女に斬つてかゝるので、鬼女は松の樹に登らうとする。

常盤津『勇猛勝れし維茂が、劍の威德に戸隱の。』

竹本『鬼神を忽ち討取りしは。』

常盤津『めざまし。』

長唄『かりける。』

常盤津、長唄、竹本『次第なり。』

維茂は中央に下手斜め向きになつて、右手に小烏丸を突き出し、左手を開いて見上げる見得。

鬼女は松の樹に登り、右の手を松ケ枝に懸け、左の手を斜に懸けて、口から火を吹き、物凄さ見得。

かけ入り大どろの鳴物にて、

木の頭。　幕。

『羽衣』の型

（帝國劇場の第一回興行の大切は、此のハイカラな容器に似つたらしい振事劇として、新古演劇十種の内「羽衣」が其の選に預つた。根が、茲方面脚本主任の右田寅彦氏が、謡曲の羽衣を原本にして書き下しただけあつて、所々の他は凡て謡本の通りだ。）

（一）

壹番目が『頼朝』と言ふ素暢氣な芝居で、お次が『伊賀越』とか言ふ肩の凝るものであつたから、何だが日本一最新式の金ピか劇場的な芝居を見てる樣な氣がしない。そこで愈々切の『羽衣』になる。諸先生方の御批評を拜見して見ると、概して此の羽衣が此の劇場臭いものだと言ふ事だからと云ふので開くのを待ち構へた。

伊賀越がすんで、妙な引込方をして雁次郎丈がペンシャン〳〵と入つて了ふと、『やれ嬉しや』と言ふ樣な氣がして、扉を開けて外へ出た。そして頭を一洗しようと言ふ考から、三階の木賃宿式な食堂（おそばやお汁粉やお壽司の）を通りぬけて元の席く戻る。と未だ開かぬ幕の内でリリーンと鈴が鳴る——『ハ、ア背景かなんかの準備が出來たのだな』と思ふ。さうしてると又槌の音がする。チン〳〵は始まる、幕外のオーケストラではブウ〳〵と鳴らしてゐると言ふ、帝劇式の混沌が頻りに頭を刺激する。又鈴の音がし、大太鼓がうたれると共にチョン〳〵と幕が明く。

（二）

舞臺は成程『風早の三保の浦廻』の景色である。中央には大きな松の木が一本。後ろの上手寄りに明神の社、そして一面の松原、遠くに見えてゐるのが、幼稚

な畫風の富士山で、一體に淡泊とした心持の好い、所謂土佐繪風の背景だ。此處の所兩側に居并んだのが、長唄連中と常盤津連中で、一樣に品の惡い見とも ないお仕着せの袴だ。

何か知らん、こちらには聞き取り兼ねるが、兎に角掛合の唄、鳴物が始まると花道の所へ揚幕の背後から、青白い電氣光線をパッと射かける。と漁夫の伯了(宗十郎)が、釣竿を肩に、頭巾を冠つた漁夫姿で踊りだして來る——そして此の斜めにつけた四間半の花道で、鮮やかな振が一頻あつてッ、、、ッと足早に舞臺へ歩いて行つて。

『是は三保の松原に住ゐ致す伯了と申す漁夫云々。』

の白あつて、偶と心付き、上手の明神の方に向いて、拜禮する。扨どうしようかなと言つた風にうろついて居る中、●●どう中央の松の木の根方にかけてあつたそれは〳〵、綺麗な衣を見つける。

『せしめたり。』

とあつてその衣を釣竿で取り取す。

『……色香妙にして常の衣にあらず、いかさま取りて返り、古き人にも見せ家の寶物となさばや。』

と言つた譯で、小脇に抱へて嬉し相にほく〳〵する。と此の途端に神殿の方に天津乙女(梅幸)の聲がして、

『のう其衣はこなたのにて候、何しに召され候ぞ。』

と云ふが伯了は頓着なしに二三度舞臺の上を持てまはる。やがて神殿の方から天津乙女が、、、いや實に美しい風姿の中にも品のある容子で以て忍び寄る。——二人がはつと顏を見合せて脊けると、又此處で、兩側の電氣室から青白い强い光線を射出すので。

『わゝ綺麗だ事！』と言ふ感嘆詞が見物席に起る。

やがて此二人の長い〳〵美しい藤間勘右衛門の振が常盤津によつて終ると、又言葉になつて、

『是はひろひたる衣にて候ふ程に、取りて歸り候よ。』

と伯丁は中々渡さない。

『……所由と言ふはこれのみぞや。それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず、早々妾に返してたび給へ。』

と頻りに哀願するが伯丁は依然として、

『家の寶にするのだ。』

と主張して、どうにも渡さない。天人はそれを奪ひ取らうと思つて、焦せるが中々取れない。此の間の二人の振の呼吸のよく合つてる事、華やかな天人と、美しい漁夫が、錦絲繡の羽衣を手にしての爭は、隨分心持の好い見物であつた。

――トゝ天人は衣が手に入らないので悲觀する、隙を窺がつて伯丁は『をつて

は面倒』と言つた風にかけ出さうとするのを天人が遮つて又長い哀願の振がある。

『……今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれど衣なし。地に又すめば下界なり。とやあらん、かくやあらんと悲しめど……力及ばず詮方も涙の露の玉かつがざしの花もしほ〳〵と。』

言ふ樣な文句があつて、乙女は泣いたり哀願したり、目を覺める樣な振がある。（此の振りの間に梅幸丈得意になつて、ずうつと身を反らした時、物の見事越後獅子以上に反り返つたので、見物人あつと言つたなり手を拍つた。）伯丁又隙を窺つて、衣を小脇にしたまゝ、花道の所までかけ出す、と乙女が追つて來て引つ捕えてやらさない。伯丁も引きづられる樣にして舞臺へ戻る。が頑として羽衣をやらないので、乙女が泣き出す、その態を見て、

『御姿を見奉れば、餘りに御痛はしく候程に衣を返し申す可し。――されどその

代りとして、聞及びたる天人の舞樂、たゞ今これにて奏し給へ。』

と條件付きで伯了が妥協説を提出する。そこで乙女も

『その樣な事ならばいと易し、人間の眼に入りたる事なき月宮殿の舞樂を舞うて見すべし。されども衣なくてはそれも叶はず、先づ衣を返し給へ。』

と要求する。

けれども伯了は、

『――此の衣を返しなば、舞樂をなさでその儘に、天にや上り給ふべき。』

と邪推して一本突ッ込むが、

『いや、疑は人間に有り、天に僞りなきのを。』

と警句を吐き、遂に伯了は衣を乙女に渡す、乙女は、さらば身支度仕りませうと、上手の神殿の中に消える。

伯了も面白い事になつた物だが、己一人で珍らしい天人の舞を見腐りにするのも、勿體ない、誰か來て一所になつて見ないか知ら、と坐り込んで考へて、四邊を見廻して居ると、此方の花道から二人の漁夫が踊り出して出る。

三保藏(高麗藏)が先に立つて櫂を持ち、後の磯七(宗之助)は魚釣ビクを背中に引つちよつて、二人とも腰簑に頭巾と言ふ輕い扮裝である。二人共達者なもので、可愛らしい顏の宗之助とスッキリとした高麗藏が呼吸を合せて、海岸式俗謠に伴ふ、あどけない振が少時あつた後、二人は後前になつて本舞臺へ指しかかる。

と、木影から出て來た伯了が。

『――昔も今もためしのないものを見せよう。』

と言ふと二人が、

『そりや何ぢや、どんなものぢや。』

『それはな、天の上で舞ふものさ……。』

『何、天の上で舞ふもの――そりやあ、とんぼか蜂か――ハテ妙な――己も踊れる……』

と言ふ話筋になつて來て、三保藏と、磯七の一人々々の得意の振がある。（どれも皆漁夫唄で、坪内氏の和歌の浦がつたもの許りだ。此の間始終、伯了と他の一人が凝と就視つて居る）。――やがて二人が手拭を楯に踊りぬいた後になつて、ようやつと伯了が『天人の舞』と言ふものだ。と敎へてやる。そして今迄の懸り合を一渡り話して、今に天人が衣を着けて出て來る筈だと言ふ。

二人も大いに嬉し喜んで、

『ほんまな話か。』

『七十五日を生き延びる、有難い事。』

『さあもう準備も出來る事だろ――さあ〳〵一所に見物致さう。』

と言ひ乍ら三人がうんとこなと坐り込む。――長唄が又一しきり――

兩側の電氣室から、白熱の光線がパッと射出される――天人の身支度が出來たのであらう、向ふから靜々と歩み出た天人を見ると、前よりも一段と華やかな服裝で、金銀で鏤めた髪飾りが目立つて、三越式の薄紗のキラ〳〵するのが前と後ろにヒラ〳〵とする、先刻の羽衣が背中に附けられて居る。胸の所には豆太鼓を二つくッつけて筒をつけた樣な鞨鼓を弔して、兩手には、その銀色の撥を執つてゐる。

そして出て來て突然に踊り出す。三人の者は呆れた樣な顏付をして、見守つて許りゐる、これで見ると天人の舞と言ふものは隨分暢氣なものであるらしい、が次第々々に賑やかになつて來る、天人はその唄と、太鼓、鼓、笛、三味の音につれて撥音をたてゝ踊りまはる、時々美しい形になる――、片足揚げた形がたまらなく好い樣に思はれた。

やがて天人の着物が變る、ヴエールが一皮剝げると、西洋畫の中にある天使と

言つた樣な姿になる。そして又その姿で三人の漁夫と入れ違ひになつての振が一寸ある、實に目の覺めると言つた樣な光景なので、見物席の方に『全く繪に描いた樣よ。』と言ふ嘖が起る。

——黃色な光線に變つた。天人の胸には太い網がつけられた、例の宙乘りの下なのだ。と、ぼんやりその方に見惚れてゐる間に、松の根方に並んでゐた三人が、舞臺の下へ沈んで行く——松も、後ろの背景も——天人の身體も宙に浮ぶ今迄見えてゐた富士の山も、松原の神殿も、何の音沙汰なしに沈んで、上から降りて來た宙空の背景と變つて、落日に孤雲を散した畫布になつた。

さうすると又——いつか知らぬ間に、薔薇色の光線に巧みに變らせてある。天人の梅幸は嬉し相ににこ〳〵し乍ら宙乘りをした儘、あちこちと二三度往來する。三五夜中の空と言ふ中に、恰好よく片足を揚げつゝも、ひら〴〵と美しい衣をさらす所は見事なものだ。

さうしてゐると、下手の宙空から迎ひの天女二人(滋子、房子の二女優)が足をばたつかせ乍らやつて來る。二人共絲につないだ玉を持つてゐる。すると又光線が變化して、非常に感じの好い紫色の深い色に變る。そして三人が、から二三度泳ぐ樣にして、かけまはつた後次第々々と上つて行く。——と云ふ所で幕になる。

——(完)——

『琵琶歌』里野の型

△由來と性格

喜多村君は次の如く話してくれました。

一體此琵琶歌は御承知の通り、大倉桃郎氏が大阪朝日の懸賞に當選された小説で亡なつた畠山古瓶が筆を執つて其脚色の相談には我々も與つたもので、書卸しの劇場は大阪の朝日座です、此の時は道頓堀に川上君の一座、仁左衛門さんの一座の芝居があつたのでそれと對抗する競爭芝居であつたのです。

處が仁左衛門さんの方は大阪毎日の「乳姉妹」を出した處から、朝日座の方が負けぬ氣になり、競爭的に大阪朝日の「琵琶歌」を選んだ次第です、イザ脚色となつてなるべく本文の味を失ひたくないと思つて畠山ともいろ〳〵相談の上、三藏の宅なども本文のまゝを使ひたいと大變苦心しました、本文には里野がぼんやり歸つて來る、宅の内では兄貴の三藏の姿が窓の障子越に影の寫つて居る件が、大變此場合の情景を現して居ると思ひました、何うか其文句通りの舞臺面を舞臺に見せたいと思つて、浪花の劇通武富瓦全君に背景を相談して、三藏の宅の間口、奥行なども舞臺に合して本式通りに造つて貰ひ、里野が歸つて來る處で、悽慘の情を添える爲め下手の笹の音も、竹に絲を付けて、幕開の兵隊が引込むと、直ぐ奈落に廻つて協力一致で絲を引いたから、如何にも凄い風音のやうに聞えて大變に場面を引立てました、本郷座の時は絲を引く者がヅボラの爲に手際好く行かなかつたのは實に殘念です。

コンナ工合で一同協力して研究して居た處、突然表から里野を發狂さしたまゝで大詰にするのは大阪の見物には納らないから、是非全快して貞次とむつまじい處を見せて呉れいとの注文で、絶對的に作者の畠山と私とが其説に反對したのですが表から強ての頼みに、買はれて居る身體ですし、それに發狂から全快の處を見

せるには、汚ない顔を美しくする爲に白く塗らなくてはならぬので、私が無性を極めて承知しないのと思はれても片腹痛い處から、到頭大詰を目出度し〳〵にして全快をする處を見せました。

コンナ都合で、役者や作者の本意でも無い處も出來て、原作者から訂正しが出るなど、畠山も餘程苦心しましたが其代り原作の味を充分に傳へて、而して小説を巧みに脚本化された物が出來上りました、仲々小説を脚色するには至難しいもので、多くは原作に忠實になると、脚本としての調子が低い物になり、お芝居的に脚色まれると、原作の面影が皆無と云ふ例が乏しくありませんが、此「琵琶歌」だけは實に巧みに出來てあるので役者の藝も生きて見えました、今日琵琶歌劇の生命のあるのは、原作の力は無論ですが、一つは畠山の功も、沒すべからざるものであると思ひます。

此畠山と云ふ人は先年死にましたが、仲々有望な男で、脚色の腕も立派なもので

今日生きて居れば第一流の劇作者ですが惜しい者でした。

お話が脇道へ外れましたが、此時の役割は私の里野に、秋月君の貞次、福井君の菊枝、原辰一の西村、小織君の三藏、親父が後藤良助、母親が兒島文衛でしたが此老夫婦が馬鹿に好く、容易に見られない適り役でしたから、大變に此狂言の光彩を添へました。秋月君の貞次も大凝りで、殆ど申分のない出來榮えでした、海岸で語る平家琵琶の如きも京都から琵琶の師匠を招き、自宅に宿めて置いて一生懸命に稽古しましたので、定めて惡落が來るだらうと皆が心配して居た琵琶を語る件が大變に見物の同情を引いて大喝采を博しました、福井君の菊枝も大層美しく、原辰一の西村も好評でした、それに小織君の三藏は柄に適つて道頓堀が湧返るやうな人氣でした。

最初の間は役者自身が泣き出して、夫が爲に調子を痛めて大いに弱りました、序幕に三藏に疊の上に死ぬぬ身分だと云はれる時は、ポロ〳〵涙が出て、顔を汚し

て困りました、小織君の三藏も私の里野が寢て居る顏の上に、涙の雨をポロ〳〵落して弱らされた事がありました、兎に角それ程一座の氣が乘つて居たのです、其後水野兒島で國華座、名古屋で深澤が三藏を出して見物の上で大成功をしたさうです、大阪でも樂之助、吉松郎の一派が角座で演じ、故人の左衞門が我童、福之助などの一座で京都の歌舞伎座で演じたと聞きます、熱海孤舟の三藏も大變な評判です、其の他各地到る處の劇場で不如歸に劣らない程興行されたやうです、後年に至つて、深澤の三藏、木下の里野で市村座で出ました、又秋月君小織君丸山等で東京座で演じました。

僕も大阪、名古屋、京都等の各地で演じましたが、東京では、昨年本郷座で高田君の三藏、伊井君の貞次、僕の里野で演じました。

本郷座で演つた時は、以前の脚色と少々異つて居ます、其原因は、一體此の狂言は、東京では寂しいと云ひ傳へられてゐたのです、それは場面が三藏の内ばかり

多くつて、令孃の出し方などは最後の方で、あとは商家とか百姓家なんかで、如何にも場面が汚いといふので餘り出なかつたのです、處が本郷座の折は、高田君が書卸し當時に、初日を川上君なんかと見物されたものですから、一寸だけは筋を知つてゐるので、僕の里野を本位とすれば、あれが好かつたから、あのまゝで行かうといふことになり、結局大詰は神武寺山で切ることになりましたが、先には、此の後に、花浦令孃菊枝の屋敷の門前と奥座敷、次が三藏の内で、里野のわづらひ、貞次が琵琶を彈く、三藏は世間から捨てられる件があつて切れるのですが原本の儘だと、戰爭の爲に三藏は召集令に接し一人の妹を置てくといふ煩悶の所へ大勢出て大團圓になりますが、僕に依ると里野が死ぬ所もやります、ですから初めの時はなんとも付かず其場で切らうと思つたのですが、前にも云つた通り、大阪では皆が新聞を見て居ますから、見物が得心が行かないので、僕も脚色者も大不平でしたが、仕打の都合で據なく大詰に、三藏の出發を付けました。

最近の本郷座迄は、いつやつても、里野が娘になつてる場から直ぐ新夫婦の所を見せてゐましたが、本郷座では先づ序幕に出した辻角力を取つて、娘と人妻になつを居る間へ入れ、いつも神武寺山で下駄が落ちて來て、三藏が怪我をする所此の角力場へ持ち込みました。

こゝで西村と三藏が逢つて、三藏は里野の嫁した後の様子を聞くと、西村は里野が舅の爲に苦心をするのを知らないから仲が好いと云ふ、三藏は喜ぶ、深澤の西村は三枚目の滑稽式で賑やかです、こゝで三藏が世間から卑められるのを眼前で見せる脚色になつて居ます。

それから海岸の荷物の件ですが、先には手代が荷物の車を引いて通ると、里野が「何處へ行く」と聞くと、手代が「あなたの所へ」と言ひ掛けるのを、貞次が冠せて「早く持つて行け」といふので、手代は默つて這入る、それを見た里野は默つて行くのは變だと云ふ心で亭主に歸らうと促すと、貞次は「歸るといふのはどこへ」

里野「家へ」貞次「お前の家は翠ケ谷」といふことになり、今日に限つて可笑しな事をいふと思ふと貞次「あれはお前の荷物」里野「荷物はどういふ譯」と不審を抱くと、貞次「離婚」といふことになつて驚くといふ演り方でしたが、本郷座の時は、行き掛ける荷物を見て自分のと知り、何故持つて行くのだらうと疑ふ、手代は氣の毒といふ意味で急いで這入る、そこで里野は荷物を送られるのだから、離縁と自覺して亭主に取り付く、亭主は濟まんといふやり方に變へたのです、尤も之れは高田君が、先のやうな演り方では、折角の荷物の件が充分に利かなくなるからとの注意に從つたのです。

神武寺の門前を使つて讀經の幕切りも本郷座の時の工夫です。

里野の性格は、兄の三藏が世間から穢多と罵られるので憤慨して居る制には、里野の方は感じないでもないが、さうひどくつらく思つて居ないやうに演て居ます、一寸考へると不理窟のやうですが、僕の解釋では、兄は親父譲りの頑固で、世間

からの仕向けの冷やかさを、絶えず怒つて居るずね者であるが、妹は女の身だから、村の者も兄程には窘めないし、それに三藏と云ふ妹思ひの兄が、絶えず里野の身を庇護つて世間の荒い風にはなるべくあてないやうにして、妹だけは眞人間にしたいといふ望みで居たから、里野の方は兄の三藏が世間から迫害を受けるに較べては、存外つらい思ひは知らず、ふつくりして淋し味の裡に潤ひがある女だと思ひます、斯ういふ譯で僕の里野は兄よりも無邪氣に演ります。

△苦心と感想

序幕三藏住居裏口の場は、張物をして居るのは原作には洗濯をして居るやうになつて居るのですが、書卸しの時の前狂言に同じやうな筋の役で洗濯をして居る件があつた爲に、それとックのを避けて張物に替へました、此張物の工合が逆樣だと本郷座の時、最負先より注意がありましたが何分隨分人に紛してやつて居る積りですが、何うもやつた事がないので或は間違つて居たかも知れません。

貞次や西村に道を敎へて、其後ろ姿を見送つて綺麗な人と思ふ位のハラです、子供の喧嘩の仲裁に入つて泣かされた子供に食物を與へる處など、兄とは異ひ世にすねない、初々しい里野の優し味を見せるのです。

貞次に花を貰つて、亡父の佛前にあげて呉れいと云はれ、染々と其親切に感じるのです、ですから幕切れの兄に花を貰つた主を問はれ「ほんとうに深切な人だね」と云ふ白も、色戀でなく、子供がお祖父さんに可愛がられて親切に感じたやうな心持ちで云ふのです。

此場の幕切れは本郷座の時のやうに裏口で演らず、三藏の宅の場を出して尺高の座敷の柱に捉まつて「親切な人だねー」と云つて、嬉しい思ひ入れで仰向く表情の方が、形が好いやうに思はれます。

二幕目の荒井三藏住居の場では、貞次の平等主義を聞いて其人格に慕はしさが加

はるやうになり、又兄の三藏を信じて貞次の話の間も絶えず三藏の顏色を偷み見して、兄もほゝ得心の樣子と見て取つて、自分も行きたい心持ちになるのです、兄に考へを聞かれ、ハッキリと答へ兼ね、耻しさうに口籠つてもぢ〳〵して、如何にも世慣れない控へ目な溫和しい處を見せるのです、兄に兄妹の緣を切るといはれ、其の恩義の厚いのに耐へ兼ねて泣く處は充分に兄妹の情の濃な處を見せて置いて、後段の悲境の印象を强めるのです。

四幕目、武田邸庭園の場は、好ましい人の所へ嫁に行くと、亭主は親切にしてくれる、世の中といふものを一向に知らなかつたのだから只嬉しかつたのだが、併しあたりまへの世に出たのだから段々色々なことが分かつて來る、殊に舅の横紙破りが非常な苦悶になる、ッイ弱い女氣の胸の煩えが顏に現れて淋しさうな風に見える、それを女房思ひの貞次が心配して親切に慰めて呉れる、つまり嬉しい思ひは一瞬時で、父親に附廻はされる、母から誤解されるので餘計に苦しむ、そこで亭主の親切にはだされて、嬉しくつて泣き、つらくて泣くのです。

書卸しの時は幕開きから、やつれて心配して居る姿を見せたのだが、それでは嫁入後の貞次と樂しくむつましい樣を見せる場が無いので、後段の悲境と照應さす爲に、此の場の幕開きを若夫婦が樂し氣に巫山戯て居るやうにした本郷座の折のが、芝居として派手で結構でした、其處へ母親が來る、此母親は決して敵役ではないので、世間普通の嫁思ひの母親で、唯父親が里野にいやらしい素振りを見せる時だけ嫉妬の餘り酷い母親になるので、其ハラがないと貞次も里野も大變に演り憎いのです。

鼻が來た、而して母親を追つて、いやらしい事を云つて引込みます、里野は下手向いて溜息を吐いて上手を向くのを、貞次が見付けて心配して尋ねます、貞次に何をしたのかと問はれ、打明ける譯には行かず切なさうに苦笑するのです、而してお母さんをどう思ふと尋ねられ、「大變に好い方」と答へます、「お父さんは」と

問はれ、ハット思つて際立たぬやうに困つたと云ふ思入れをして愁ひの聲で「眞に優しい方でムります」と沈んで云ふのです。

同、主人正次居間の場では、舅からいろ〳〵いやなことをいはれ、手きびしく斷ることが今の地位として何うしても出來ない、それに自分の身分が身分だから誰にも云へないで、益々切ない思ひをして困る、尤も舅が貞次の嫁になる事を賛成して貰つてくれたのだから猶更です、今までは小ひさい波であつたが、急に大波が起つた、それはお袋の誤解から、愈々本當の不都合になつて、折檻されて顛へ上がる、一時は、方便だが表面は赦され、やれ嬉しいと喜こびます。

此一度許される事は原作にないのですが、書卸しの時、秋月君の注文でさうなつたのですが、芝居としては波瀾があつて結構です。

此場は本郷座の時は、全編の骨子とも云ふべき、舅の不心得、里野の堅い心を見せる件を警視廳の注意で極く控へ目にする事になつたのは殘念です、のみならず少からず此の狂言の興味を減じました、何も不倫な事をしたのでなく却て戒めになるやうに出來て居るのですから、決して差支へがないと思はれますが……。

由比ヶ濱月夜訣別の場では、何にも知らず貞次と二人切りで、誰に氣兼ねなく樂しそうに物語りをして居る處へ、自分の荷物が通るので初て變なこともあると心附き、貞次に離婚の徐義ない譯を云ひ聞され、心のうちには波瀾があつて、此の女の性格を現はすとしては演り好い場です。

此場は本郷座の時は伊井君が低い下駄を履いた爲に、私は雪駄を履いたが、畫面と云ふ點から考へると、何うしても黑塗りの裏の穿てある下駄でなくてはならぬと思ひます書卸しの時は下駄であつた爲に大變趣きがあつた。

書卸しの時は羽織を着て居ると次の場で困るので羽織を貞次に渡して、記念に琵琶の本を一冊貰ふやうになつて居ましたが、本郷座の時は夏で羽織を着て居ない代りに、簪しを渡して本を貰ふ運びでしたが、此方が無理がなくて詩的で善うム

いました、琵琶の本も何百卷で一ト揃ひと定つてあるものだと聞いて、原作にも脚本にもないのですが、秋月君と相談の上で、何百卷の内一卷缺けても缺本だから早く記念の本を持つて武田の宅へ歸るやうになつて、本が揃ふやうになるやうに心掛けよ」と云はれるやうにしたのです、それから狂人に紫の色は大層調和するそうですから、此琵琶の本を包む紫の服紗を少々大きくして、帶の間に挿み時には涙を拭く動作などに用ひました、此の邊から激しい發狂ではないが、餘りに悲歎が重なるので、何處か氣の抜けた處を見せて、發狂のやうにも見え、又然うでないやうにも見えるやうな工合に、少々ヒステリーの兆候を見せて置くのです。

五幕目、荒井三藏住居の場は、門の前までは來たが、兄に會はす顏が無いので、とつおいつ煩悶する、トゞ木の根に躓いて下駄を引繰返した音で兄に氣付かれ三藏が這入れと溫かい情に滿ちた言葉で呼び入れるので、其の情合に引張られるやうにして内へ入ります、而して洋燈の灯影に、兄と差向ひになつて、淋しい裡に

兄妹の情を見せるのです。

此時荷物は未だ着して居ないのです、其譯は自分は、汽車で來たから、荷物はズツと後から屆く事にしてあるのです。

兄が優しく云つてくれゝばくれる程、胸が迫つて何も云へぬやうになるのです、三藏は焦慮て「一體何うしたのだ」と問はれ、「勘忍して下さい」と幽かに答へます。それを冠せて兄が「何うしたんだ」と問ひ詰めるので「妾去られて歸りました」と切なそうに答へます、三藏が理由を聞きます、誰に嫌はれたのだと尋ねられ、お母さんや、お父さんかと糺されて、夫とは云へず、「夫に去られました」と血を吐く思ひで云ひます、事の意外に三藏は憤激の餘りに飛び出して武田の宅へ談判に行かうとする、それをやつては一大事と足に縋り付いて留める、而してモウ〳〵胸が掻毟られるやうにいろ〳〵心配や悲みで掩はれて居る爲に、此兄を引止める言葉もしどろもどろで、一向不得要領で、云ふて居る自分も何を口走つて居るか

解らぬが、只兄を武田の宅へやつてはならぬと云ふ一心から口から出任せに云つて止めるのです、何うしても三藏は承知しない、其處で里野が、「妾に別に不都合があるとも思ひませぬが、と云つて誰が惡いのでもない、斯ういふ身分に生れた妾等二人が惡いのだから、何うぞ妾が可愛いと思つてくれるなら、兄いさん何にも云はないで、今まで通り、宅へ置いて下さい」と賴みます、此一句の白廻しは餘程哀れに淋し氣に云はないと、是で火の樣に猛けつて居る三藏が我を折つて、武田へ談判に行く事を思ひ止まるわけに行かぬのですから、仲々大切な文句です。

三藏は妹がいぢらしいので、怒りの顏を和らげて、妹を慰めます、強く云はれる時で反抗心を起すものですが、優しく言はるれば言はるゝ程、女氣の狹い胸が悲みで一杯になつて又た愁ひに沈みます、漸く夫を察した三藏が氣を替へて「寢やう」と云ふので、里野は「それぢやお床をのべませうか」と答へる、三藏が「暫時の間に大層丁寧な言葉になつたな」と戯談を云ふのも、里野の胸には思ひ出の種で、じつと沈んで居る、里野はやをら立たうとすると、月夜の窓を掠めて鳥（多くの場合雁）が過るのを見て、何の氣なしに二足程前へ出る、軒の柱に捉つて鳥の行方をじつと凝視て居ると、三藏が「定めて今夜は淋しからうなア」慰める氣で何の氣なしに云つた一語が、里野の胸には強く響く、堪へ〳〵て居た胸の煩悶が一時に切れて、ワアッと聲張揚げて泣伏す、三藏が吃驚して抱き起すのが、此の場の幕切れです。

三藏住居裏口の場、此處へ仕出しを出して前の場と時間が餘程經過た事を示すのです。

里野は寢た振りをして兄の寢息を窺ひ、そつと裏口から脫出して、納戸口を閉めた切りスーッと魂の拔たやうにして花道へ引込みます。

此處の件は、舊式の後を向いて愁歎の表情などして芝居をしては可けないのです。其譯は武田に歸りたい一念より何もないのですから、何もせずにスーッ引込む方

が哀れが深いからです。

三藏は妹が居ぬので驚いて出て來て探しに行きます、此處で舞臺が暗轉になつて神武寺山庚申堂の場、兄の寢息を窺つて、素足のまゝ忍び出で、大榎の周圍をグル〳〵と廻つてお百度を踏む、三藏が後を追ふて來て、月の光りを立木の陰に避けて、里野の姿を見て居ると、里野は三度目に榎の前で拜み、一心不亂に「一生に一度のお願ひですから、早く武田の宅へ歸れますやうに」と、念じて居る聲が三藏に聞えるので、剛氣の三藏も感に打たれて悄然として凝視つて居る、七度九度目と半目〳〵に立上つて念じて居る、次第〳〵に後になる程足取りが亂調子になる、最後に木の根に躓き、血が頭にのみ上つて居るので、フラ〳〵として蹌踉る、起き上つた時は物狂はしい凄い眼付で立木を見上げ、何の考へもなく、喪心の體で立つたまゝ首を三度ほど振つて指の二の節を嚙み切り〳〵〳〵パタリと俯向きに倒れる、三藏が驚いて助け起す、里野は口から血を吐いて居るので舌を食切つたのだと思ふたが、里野が食ひ切つた指を口から出して三藏に渡すので、三藏は初めて里野が指を食ひ切つた事を知り、周章て手拭を割いて里野の指を結つてやる、里野は食切つた指を榎樣に上げて呉れいと仕方する三藏は詮方なく指を榎樣に上げる。

里野は已に發狂して居るので、食ひ切つた痛い方の手を何の痛みも感じない體で地へ突いて居る、里野は指が榎樣に上げられたのを見て仰向けに引繰返る、三藏は里野を抱き起して、負つて歸らうと三足程下手に歩くと、里野が負はれながらゲラ〳〵と凄く笑ふ、三藏は驚いて思はず里野を地に落すのが幕切れで、里野は何處となく見當を付けずに眺めて居て、ニヤ〳〵〳〵と笑つて居る。

怨んで氣違ひになつたのでなく、思ひ詰めての發狂ですから、氣は狂ふて居ても騒狂の方でなく、氣は立つて居ないやうに演て居ます。

神武寺の境内の場は、「俠艶錄」の力枝と同じ型になり易いので、なるべくつかないやうに狂人の風を見せるのです、それから以前は狂人が全快するやうにして、

里野は窘められた母と圓滿な處を見せる爲に、三藏の戰地へ出發を、夫婦兩親打ち揃つて見送りに來た處を見せたものですが、近頃は發狂は癒さずに、貞次の顏だけはウッスリ解るらしい位に止めて、狂女の體で終る方が、餘韻が深からうと思つて其方になつて居ます。

平家の本を持て出で來るのですが、此場で焦れて居る夫の貞次に顏を見合すと、いくら狂人でも嚙り付く位ゐの動作はせねばならぬので、可成貞次と物は云つても顏を見ないやうにして居ます。

狂人の持物に就て、昔なら笹を持つ處ですが、然うも行きませんので、紫の包に平家の本を持て出るので、大變形の上に助かりました。併し貞次と三藏の長い對話の間、狂人の科が手持無沙汰ですから苦心致しました、其の結果其長い間は、初ば大きな標石に眼を付け、それから上手の門の屋根を、ジッと見て、次に門の下に迄行つて屋根裏を見る事にしました。

此場は本郷座の時は脚色が前回と殆んど異つて居る所から、高田君の三藏とも殆んど掴みで初日を出したのですから、充分に打合せはなかつたのですが、初日に何うかして三藏の傍へ行かうと考へて居ると、「妹は狂人になつた」といふ三藏の白を聞いて、此邊で三藏の傍へ行つても差支へないと思つて、寄つて行つて一寸三藏の袖を引くと、三藏が袖を輕く拂つて「アンナ身になつた」と泣く處がしつくり息が合つた爲に、千秋樂まで其型で演りました。「行かう行かう」と三藏の手を引いて下手へ行かうとするを、三藏は押へて左の手をグット引く、里野は後向きに兄貴に身を摺寄せる、三藏が鉈で斬らうとするのを、グルッと上手へ廻つて無意識に止めるやうに演りました。

困つたのは伊井君の貞次が、門の柱に身を寄せて考へに沈んで居るのを里野に引張り出して呉れいとの注文でしたが、此奴には弱りました、此場合貞次の手を引張つて前へ來る事は不自然に見え易い處から、いろ〳〵苦心の結果三藏に歸らう

〜と手を引いて上手へ行かうとして手を振拂はれ、一寸蹌踉て尙も三藏の手を取らうとして間違へて貞次の手を取り、是を前へ連れて來て、背中合せになつて里野がズル〜と坐り平氣な顏をしてキョロ〜して居ると、貞次も詮方なく坐るといふやうな段取りにしました。

書卸しの時は、前に述べた外に、菊枝の宅の場と病室の場停車場の見送りの場がありました。

菊枝宅の場では、西洋風の應接室で、三藏が菊枝に里野の身上話をして居る間、里野は上手の額を見て、次に中央に懸つてある月夜の海岸の額を見て、狂人ながら由比ケ濱の哀別を思ひ出して、嬉し氣にニーッと笑つてる裡に段々顏色が曇つて來て啜り泣くかと思ふと、不意にグラ〜と笑ひ出すのです、此時は子供が無心に遊んで居るやうな心持です。

菊枝に、「里野さん〜」と呼ばれて見物を背にして居たのが振向く折には、變な顏をして眼に涙が一杯溜つてないと情が移らぬので、初の內は涙が出ましたが、段々末になると涙が種切れした爲に人造涙を製造して涙の溜つて居るのを見せました、菊枝が傍に寄つて來て、「妾と貴女と姉妹になりませうね」と云はれ、「エ、なりませう」と平氣で答へます、武田の宅へ歸らうと菊枝の手を取つて上手へ行かうとする、菊枝は可愛相な者と同情の思ひ入れ、三藏は仰向いて長嘆息する、里野は上手を向いてクス〜笑ふのが此場の幕切れです。

病室の場は、里野が菊枝の情で病氣の養生をして居る處です、高枕で寢て居た里野は身を起して「少將の記念には」と唄ふと、何處からか琵琶の音が唄に合して洩れる、此鎌倉で此琵琶を彈くものは貞次よりないと三藏が怒るのを、菊枝が取做して貞次を宅へ入れ、里野と合す件なのです。

停車場見送りの場は、里野は丸髷姿で三藏の出征を貞次や兩親と共に見送りに來た處を見せます、而して武田家の風波が納つて和氣藹々たる處を見せる爲に、里

野も兩親と手を引いて居る處を見せます、此場の里野は未だ病氣が充分に全快して居ぬ腹で、何處となくポーッとして居るやうに演りました。

△道具、着付と科白

○序幕、翠ケ谷荒井三藏住居裏口之場　道具、平舞臺、正面田舍家の裏口、勝手の腰障子と同じ並びに納屋を見せる、竹林、立木が上下にある、納屋の近くに井戸、勝手口の横手に張物板を立掛け、里野は納戸地の田舍縞の着付、野暮な友仙の柄の晝夜帶、荒い飛白の前掛姿に赤の襷を懸け、裾を端折つて桃色メレンスの腰卷を見せる、半染の手拭で姐樣冠りをして、疊付の汚たない下駄を履いて汚たない洗濯物を盥に入れ張物をして居る、西村と貞次が道を聞く、里野は張物の手を止めて、揚幕の方を指して親切に敎へる、二人は禮を云つて元來た道へ引返す。里野は、ボンヤリ其後姿を見送つて居たが、思はず張板につまづいで蹌踉となり。

氣がついて張物を片付けて勝手口から奥へ入る、子供が來て喧嘩をするので、里野が飛出して惡太郎を追拂ひ、一人の泣いて居る子供に團子をやつて慰める、他の子供が泣いて居る兒を圍んで上手へ引込む、其處へ村の者八五郎が來て里野を口說く。

三藏が歸つて來たので八五郎が逃出す、三藏が「里野、酒を買つて來てくれ」といふので、里野は行かうとする、其處へ泣いて居た子供の母親が來て穢多の癖に子供に物をやるのは身分を辨へぬと罵つて去る、三藏は急に里野に買ひに行かずとも宜いといつて家の內に入る。

貞次と西村が來る、里野は腰掛を出して茶を運ぶ、西村に問はれて、父もなく母もないものだと、身上話を語る、貞次から赤い花を貰ひ喜ぶ、三藏が不愛相に出て來る、二人は去る、里野は兄に今の二人の親切を物語る、佛前に供へよと云つて貰つた赤い花を示す、三藏は喜んで早く佛前に備へよといふ、里野はイソ〳〵と

上手へ行掛け、ジット上手へ行つた貞次の後姿を懐かしそうに見惚れる、三藏に何を見て居ると叱られ、ドキマギする。

○同、荒井三藏住居の場、道具、上手寄りに尺高の二重屋體、家の内は上手に佛壇、その前に貞次の置いて行た赤い花が立てゝある、押入れ、下手一尺程、肱掛窓、上手吹晒し、竹又は木の丸太の縁側、圍爐裏に自在が懸つてある下手門の外は袖垣、その向ふは竹藪。

里野は前の着付と同じやうなもの、唯赤地の半襟を掛て居るのと、藁草履を履いて居るのだけが異つて居る、三藏は二重の上手横の土間に筵を敷いて後向になつたまゞで相變らず鉈で薪を切つて居る、里野は二重で火を起して居る、西村が來る、里野は兄の命令で臺所の方へ行く、兄が呼ぶので出て來て表に待つて居る貞次と番頭を迎へる、里野は貞次と顔見合せて恥しき科、貞次が兄に挨拶をしてゐる間に、里野は澁茶を酌んで出す、貞次が嫁に欲しいと懇願して居る間、里野は

後の方で、心配相に兄の顔色を覗ふ、兄に意見を問はれ、低い聲で「妾どうせこんな身分に生れたのですから、お嫁になんか行かうとは思つてやしないけれど……」といふて一寸俯向いてモヂ〳〵しながら「ねえ兄さん……」と情を籠めて甘つたれて云ふ、袂を咥へて俯向く、兄に行きたいのかと問はれ、無言で恥しそうにうなづく、兄が繰返してダメを押すので又うなづく。

兄が父の位牌を前に置いて嫁になつてからの心得を云ひ聞かすのを、俯向いて手を疊の上に聞いて、ジット聞いて居る、西村等が歸らうとするので、平舞臺に降りて下駄を直し、一同と門を出やうとすると、西村が三藏の見送りを頻りに辭退するのを、里野は、ハット思つて兄に耳打する、里野は嬉しいやうな悲しいやうな心持ち。

△四幕目、武田邸庭園の場　道具、平舞臺、中央に亭、其の前に陶器製の床几二つ三つ置く、築山泉水の背景。

里野は草色がゝつた地色の立縞に立枠のある地味な柄の着付、花色繻子の丸帶、丸髷（書卸しの時は着付は俗に四つ縞と云つて、里野の生れと同意の處から、少少洒落氣があるやうだが、此柄が大變好いと思つて出た處、大阪中の評判になつて、或呉服店から里野縞と云つて賣り出した處、非常に賣れたそうだ）で上手に貞次、下手に里野は共に床儿に腰を掛けて睦じく語つて居る、里野は園亭から茶を酌んで出す貞次が菓子を食へと里野を追巡す、そこへ母親が來る、父親が續いて來る、里野は今まで浮々としたに引替へ、急にイヤナ顏をする、而して父親の前に茶を持て行く、土瓶を持て上手へ行かうとすると父親が呼び止めて、猫撫聲で無暗に里野を賞める、其度毎に里野は切ない思ひ、母親は腑に落ちぬ體、貞次は苦り切つて居る、トゞ里野の代りに母親に湯を取りにやる、母親は頗る不平の體で上手に引込む、下女が呼びに來るので父親は澁々上手に行きかけて、里野の方を向き呼びかけるので、里野はクルリと下手向き柱に倚りかゝり、幽に溜息をつく、後で貞次は上手、里野は下手の床儿に椅け、貞次にしんみりした調子で一體お前は家のお父さんやおつ母さんの事をどう思ふと問はれ、今まで俯向いて居た顏を漸く上げ、「おつ母さんはいゝ方だと思ひます、お父さんは大變優しくして下さいます」と優しくの處をウルメて悲し氣に斷々に答へる。

貞次に優しく慰められ、里野は顏に半巾をあてゝ、落る涙を拭きながら「貴郎が餘り優しく云つて下さるから……」と口籠つて俯向く、上手に湯を取りに行かうとする處へ、下女が來て、父親が呼んで居るといはれ、ジット愁ひの心持ちで思入れをして、靜に貞次に行つて來ると告げて、心の進まぬ體で上手に行く。

△同、主人正次居間の場、道具、座敷の上手横は床の間下手横は母屋に通ずる戸、縁側の欄干越に庭の泉水が見える、左右とも襖の出入口。

正次は机を前に控へて、何か認めて居る、里野は前場の着付でおづ〳〵這入つて來て、直ぐ入口に坐り俯向いて居る、正次が一人居て物をいふ毎度にハラ〳〵し

て居る、正次に茶を持て來いと云はれ、正次の前へ持て行くと手を握られるので茶を零し、逃げやうとすると、益々強く正次が手を握り離さない、夫を母親が見付ける、嫉妬の焔に燃えた母親は下手に里野を引据ゑる、正次はコソ〳〵と下手に逃げる、母親は有合ふ長烟管で里野を撲る、里野は抗ひもせず袂を顔にあてゝ泣く。

西村夫婦が飛び込んで來て里野を連れて行く、母親が貞次と問答の結果、貞次は里野の手を引いて這入つて來る、里野は下手にジット俯向いてひたすら詫る。而してお辭儀して悄然と席を退く。

△同返し、由比ケ濱月夜訣別之場　道具、平舞臺、正面相模の海の書割、月は高く昇つて居る、舞臺中央に一艘の漁船、捨石が處々に散在して、後方に磯馴松の立木。

着付はお召、友仙の襦袢、縮珍の丸帶、變り紫の半襟、黒塗りの兩グリの下駄（時には梅鼠色の羽織を着て出て貞次に渡すのもあるが、近頃は多く羽織を着て出ぬ）

樂し氣に上手から貞次、西村夫婦、里野の四人が靜に歩いて來る、西村夫婦は花道から去る、其後姿を里野は羨ましそうに見送る、それから二人肩を並べて濱邊を逍遙する、荷車が上手から花道の方へ通る。

里野は不審の面持で車の後へ跟いて行き、花道の附際で車に追付き、風呂敷の端を捲つて見て、「あ、これ妾の荷物……」と叫んで急に顔色が蒼白る、狂氣のやうに走つて良人の膝に縋り付く、貞次に「里野、――お前は何にも知らないんだ、赦しておくれ」といはれ、泣聲で「それぢや妾は出されるんですか」と怨む。

尺八の音と波の音が哀れに聞える、いろ〳〵愁歎があつて、里野は漸く泣く〳〵承知する、貞次が別れに琵琶を語る、終際にぢつと俯向いて聽いて居た里野は堪へ兼て貞次の膝に取縋る、車夫が來る、里野は平家の一冊を貞次から記念に貰つて、力なく車に乘る、花道の方へ行つて、車の上から振返りて見つゝ「早く呼戻

して下さいよ」と頼む、船唄が遠くに聞える。

此場の里野の離絲を悟る動機は、書卸しの時の演り方が少々お芝居的ではあるが見物に強い印象を殘すと思ふ、參考に迄其折の事を話すと、里野は非常に亭主を信じて居るものだから、スッカリ安心して樂し氣に話をして居る、其處へ自分の荷物が通るので、お前、何處へ行くと番頭に問ふと、番頭が只今停車場迄と答へる、貞次は堪り兼て、早く行けと云ふ、番頭は何も云はずにズン〳〵足早に花道へ引込む、里野は一寸追駈けて、立戻り、其後妾を見送りながら可笑しそうに笑ひ、「隨分何かして居るわね、妾が云つて居るにズン〳〵行つて了ひました」といふ、貞次は沈んで居る、里野も一寸テレて、里野「歸りませうよ」貞次「歸るて何處へ」里野「宅へぢやありませんか」貞次「お前の宅は翠ケ谷だよ」と思はず口を滑らす、里野はそれを戯談に聞いて、里野「貴郎は今夜餘程何うかしていらつしやるそんな事をおつしやらないで早く歸りませう」と笑ひながら云つて急き立てる、

貞次は堪らなくなつて、貞次「お前は何にも知らないんだ」と苦し氣に云ふ里野「エー」と妙な事を云ふといふ思入れをする、貞次は言葉を繼いで、貞次「今行つた荷物は、アレハお前の荷物だぞ」里野「ナニ妾の荷物」ヒヨイと一足前へ出して向ふを見込む、此處からは貞次が切ない胸を打明けて里野に詫びる處は本郷座の時と順序は變らない。

△五幕目、荒井三藏住居の場　道具は二幕目と同じ事、二重には笠のないランプが薄暗く點いて居る、道具半廻しになると、下手一面の竹藪、風の音が凄く聞ゆる、里野が淋しそうな姿で現はれる、三藏が呼び入れる、舞臺は元へ戻る。

三藏は晩酌の體、里野は座敷へ上つても顔は俯向いて悄然として居る、三藏に譯を聞かれ、「濟みません」と、、、タッタ一言、頭は盤に押付んばかり「妾去られて歸つて來ましたどうか勘忍して下さい」と切なそうに泣聲でいふ、三藏は父親か母親かどちらに去られたのだと聞く、里野は苦しき思入れで答へない、三藏は尚も深い

仔細を云へと叱る、里野は切迫詰つて貞次に愛想を盡かされて出されたのだと語る三藏は短刀を持て立ち上る、里野は驚いて其手に縋り、誰れが悪いのでもない妾等兄妹の身分が悪いのだと諦めてくれと泣きながら頼む、三藏も得心して、何うあつても武田へは歸さないと憤慨する、是を聞いて里野は突然泣き出す、荷車を引いて爺さんが來る、里野は堪り兼て爺さんに顏を見られないやうに室の隅の方に俯向いて泣いて居る。

爺さんが歸つてから三藏はもう寢やうといふ、里野は氣抜けのやうになつて居る里野は下手の柱によつて何處ともなくぼんやり見詰める、道具廻つて四邊が暗くなる。

序幕の三藏裏口と同じ道具、戸を開けて里野は縞の寢卷姿で四邊を窺ひながら、花道の方へ急ぐ。

△神武寺山庚申堂之場　道具、中央に大きな榎の老樹にしめを張つて安置してある。

前場の着付で里野は下手から走つて來て、榎の前で、どうぞ貞次の傍へ戻れるやうにと祈る、少々上づつた氣味で浮足で榎をグル〳〵と何遍も廻る、末へ行く程早く廻る、トゞ小指を咥へて嚙み切り氣絶する。

後に忍んで樣子を見て居た三藏は飛出して介抱をする、里野は嚙み切つた小指を榎樣に上げてと頻りにいふ、三藏が里野を背負つて歸らうとすると、里野が背中で、ゲラ〳〵と物凄く笑ふ、三藏は思はず里野を地上に落す。

△大詰、神武寺境内の場　道具、下手には前幕の榎が立つてゐる、上手には苔蒸す石段があつて奥山へ通ずる路、その邊は樹木鬱蒼として繁つてゐる、榎と石階の間は平地だが、それでも餘程高臺になつて居るので森の梢の上に遠く相模灘を見渡す。

里野は、鼠地色の縞の大柄の着付、赤の板締めの色の褪せた肩入れ、友禪の紫の

腹合せ帶、切り繼の長襦袢で、胸に平家の本を抱いて、花道から村の子供に相手になりながら來る、菊枝と三藏の對話の間、キヨロリとして居る、突然兄に武田へゆかうといふ。

江島春塵が來て、一同對話の間アチコチと迂路〳〵して居る、江島の、マントを弄つて見ることなどの科がある、菊枝に姉妹にならうといはれ、えゝなりませうと平氣で答へる、三藏に連れられて正面奥へ引込む。

△同、門前之場　道具、上手扉も何も取れた寺の門、其下手に神武寺と彫つた大きな石標、眞中に一本の古樹が立つてゐる、下手遠く、青田を望む。

里野は前幕の姿で捨石に腰を掛けて、平家の本を胸に抱いて正面を見詰めて居る村の若者が散々揄ふ、里野は「少將の形見には夜の襖、康頼入道が形見には一部の法華經ぞ止めける……」と語る、語尾はウルンで哀れ氣である、眼に一杯の涙を漂へて、感極つて俯向く、上手向いてツゝと立ち上り、山門の下まで行き、又琵琶を語る、フハ、、、と淋しく笑ふ、四邊を見廻し〳〵上手へ行掛ける、貞次が上手から出て來て、里野の後から抱き止める、里野は一寸柔く倒れて片手を地に突いて、左手を貞次の膝に置き、下手を見て居る、三藏に連れられて下手に行きかけ、又引張られて蹌踉ながら中央迄來る。

三藏が貞次が嫌味を云つて怒つて居る間、奥の方で平家の本を擴げて見て居る、三藏が「事情とは」と貞次に責めかけると、「兄さん歸らう」と無心に呼び止める、尚も三藏は罵る、貞次が謝罪つて居る間神武寺の境内をウロ〳〵して居る、三藏が貞次に斬りかけると、里野は其手を押へて歸らうよといふ、三藏が里野の顔を見て「里野」と呼ぶと「あい」といたいけに答へる、而して里野は貞次の足許に倒れる、兩親や西村が出て來て事情を話すので三藏は漸く納得する、里野は何と思つてか、「武田へ行きませう」といつてスーッと下手へ行く、三藏は「里野、お前直らねえのかな」と悲しむ、里野は上手へ蹌踉けて抱いて居た本を落し左手で貞次

を掴へて、右手で正面を指して、嬉しそうに笑ふ。（幕）

『矢の根』の型

登場人物

一　曾我の五郎時致　左團治　一　同十郎祐成　梅幸

一　馬士　猿蔵　大薩摩文太夫

本舞臺、眞中の中足の家體、三方市松の上げ障子、上の方淨瑠璃家體、此臺のわきに梅の立木、（但し仕掛け物）下手に網代塀、日覆より紅白の釣枝、淨るり臺に大薩摩文太夫、三味線、杵屋佐吉居列び。

舞臺正面に、後見が紋付の着付、柝の上下で大時代の大間な狂言ゆゑ其おつもりで見物を願ふと口上を言つて引き下る、スグ淨瑠璃になつて。

淨『去る程に曾我の五郎時宗は、惠方に向つてふのつと、夫れ父の仇には俱に天榧和合樂、壽福開圓萬卷の、軍書の窓の北面は、殘んの雪の朝綠、春風春水一

枝の梅、豁と開くや花の春、新し庵の物毎に、改まれども時致は、今年も古庵古疊古井と言ひし丈にて、矢の根磨いて居たりける』

ト大小鼓入りの鳴物になり、三方の障子上る。

正面に吉例矢の根五郎、車鬚荒事の筋隈取、赤地に蝶々の縫ひの襦袢の上から太い襷をかけ矢の上を右手、下を左手で握り、炬燵櫓に腰を掛け、上手の砥石に矢の根を研いで居る見得。

後に矢屏風、朱の房絲にて三本、大小を掛け脇に矢の根を立てる臺あり。

浄『傳へ開く養由が、矢先は遠き高麗唐土』

で五郎は首を右から左、左から右、右から左、右から左へ振りグット大きく右から首で圓の字を畫いて、上から見下した見得、矢の根を上手の砥石に當てゝ二度一息に研ぎ、矢を返して次に大きくゆつくりと一度研ぎ、又二度一息に研ぎ、矢を左に持ち替へ小脇に抱へて、右手を上げて揚幕を見込んで見得。一寸

上手斜に向き直つて、又下手の方を向き、左にグット矢を抱へて右手を高く上げて見得。

浄『近く和朝を尋ぬれば、鎮西八郎爲朝、源三位頼政が、古今無雙の弓勢にも』

でこゝらより、正面より上手を向いて、右手を擴げたまゝ、三つ數へるやうに指し、矢を弓の思ひ入れで、左手に持ち、眞直ぐに立て、右手で矢を番へ放つ形をして、グット上手を睨む。

浄『優りはするとも劣らじと、天性不敵の氣丈者』

で左手で右手を叩き、下手の方へ向き直りジリ〳〵とにじり足で後向になり、下手、上手を見廻し、グルリと上手の方から正面へ向き、左手に持てる矢を轉して、右手に持ち、矢の根を下に突き、左手を高く上げて見得、矢を左に持つて、右手を仰向けにして空に向け右手で左手を叩き左手で矢の根を突き、右手を大きく横から胸の邊へ持つて來て、掌を握り見得。

五郎『虎と見て、石に田作柿膾、矢立の酢牛蒡凝り大根一寸の鮒に昆布の魂』

で右手を下げ襟を輕く持ち、

『譬は〻祐經節汁の、鯨の威勢振ふとも、我カッ〳〵と云ひ乍ら』

で右手を口の邊までセリ上げ、

『鯱鉾の飾海老、赤いは海老が讓の面、つく〳〵世上を鑵子の蓋、ちらり間鍋文福茶釜、毛抜鋏の折までと、古金買の遣羽子の、一夜明けても舊冬の、鎖帷衣小手脛當』。

で一寸首を振り、

『横に寢の日の初寅も、どうで貧乏するからは、食合ひの無い福の神、自問自答の惡體を、申して申さん、先づ大黒は慮外者――』

ト引張る。矢をかたげる。

淨『とはどうじゃ』

上手向き、左手を出し、矢を右手で指し、

五郎『はて頭巾を脱かぬはさ』

左に矢を抱へ右手を上げ、

淨『惠比壽は身持がうすきたない』

五郎『とはどうじゃ』

淨『ハテ鯛をおたきて脇の下』

で左に鯛を抱へ、右手に矢を持ち肩に載せ釣棹のつもり夷の形をする。

五郎『江戸前にてもあればこそ』

淨『精進日には付合れぬ』

で左手で矢を逆にして根を持ち、大きく笑ひ右手を口の邊に持つて行く。

五郎『毘沙門天の兜頭巾は、用心過てうつとしい』

淨『布袋は土佛福祿壽は』

で兩手で腹の大きい形をしてそれから、兩手を頭の上に立てゝ頭の長い事を見せる。

五郎『月代するに手間がいる』

で右手を一寸頭にやり、

淨『辨財天は船饅頭、浪乘り船の錢儲け』

で矢を櫓にして船を漕ぐ形、次に矢を左手に抱へ、右手を擴げて前へ出す。

五郎『儲けられうか、られまいか、苦勞にするは國土のたはけ』

下手上手を見廻し、

淨『富貴天に在り』

右手を仰向けに上の方に出し、

五郎『死生命にあり』

右手を上にあげる。

淨『いづれ』

五郎『祈るに』

淨『所なし、實に顏回が陋巷に』

で右手を胸の邊にあて、

五郎『一單の食、一瓢の飲』

淨『疎食を食ひ水を呑み』

で水を呑む心で右手を口に當てる。

五郎『肱を曲て枕とす』

で左手で矢を突き、右手を胸の處にやる。

淨『樂しみしんぞ其の內に、有るにまかする安烟草』

で厚綿の黑地に蝶々の着付を着て、炬燵を後へやり、烟草盆烟管を取出し。

淨『烟管おつとり吸付て、鼻の先なる春霞、打ち眺めつゝ時致は、寬々として居

たりける』

で右手の烟管に烟草を詰め、火をつけて高く口の邊まで持つて行き、左手の袖を拂つて、肱を張り正面を見て居る。

後見上手に扇子寶船をならべる。

淨『時に年始の門禮者、素禮年玉鋏箱、三味線箱の一ッ調子聲張り上げて物もう』

一寸上手を見て、

五郎『どうれ』

で烟管をハタ〳〵、四邊の物を片付け、上手向く。

淨『大薩摩文太夫年始の御禮申しまする』

五郎は下手に坐り。

五郎『是は〳〵早々との御出、殊に年玉として末廣幷に寶船、裃とつてイザ奥へ、祝ひませう〳〵』

と上手へ左手で案内する。

淨『イヤ、さう致いては、居りますまい、方々で御座れば尙永日の時を期し、ゆるりと御意を得ませうぞ』

五郎『デモ一寸盃を』

淨『いゝや、御免〳〵春永にと、言捨てこそ立歸る』

五郎は立上つて上手に行き一寸下の年玉を見て束に立つて靜に坐り。

五郎『大薩摩文太夫なればこそ、時致の處へ祝ふてくれるハテ奇特な男ぢやなア』

と三寶の上にある年玉寶船を取り出し、目錄と寶船の包みを見較べて、

淨『其の時五郎年玉を、開くや扇寶船、ハテ氣の付たる年玉と正月心若翟に上から讀んでも長き夜の下から讀んでも長き夜の』

で寶船を擧げ、右足を踏み出して寶船を見て、次に後を向いて左の足を踏み出して同じやうに見る、後で寶船を高く上げて見て正面に向き直り、

五郎『枕の下へおつかつて、敵祐經が首を引こぬく夢でも、見べ、い、かー』

ト引張る。

浄『食後の一すゐ一樂と、砥石を拭ひ無雜作に、是れ邯鄲の枕ぞと』

で左の袖で砥石を拭ひ、砥石を正面に持ち出して其下に寶船を敷き。

浄『ふんぞりかへつて時致は』

で。

五郎『ヤットコトッチヤア、ウントコナ』

と云ひながら、兩手を大きく振つて右足から前に出で、次に左足を前に踏み出し、右起を後へ入れて後向きになり、兩手で胸を叩き、手を拍つ。

浄『しばしまどろむ高いびき、ゆたかにこそは、臥しにけれ』

で兩手を上にあげたまゝ、眞直ぐに仰向けに後に反り中途からバッタリと、砥石の上に倒れ、兩足の指の先を爪立てゝ寢る。大薩摩になつて、

浄『ア、ラふしぎやうたゝ寢の、かたはら寒き風の足、舍兄十郎祐成うつゝともなく、いと色あをざめたる顏にて、忽然とあらはれいで』

で大ドロになり、

上手梅の木の仕掛けより十郎が腕を拱んで心配相に現れ出る。着付が赤味がゝつた幽靈らしいので如何にも影が薄い。

十郎『如何に時致、我計らずも今日祐經が館へ虜となり、籠中の鳥、網裏の魚、働かんに力なし、急ぎ來つて急難を救ひくれよ起きよ五郎、覺めよ時致』

であはれにかすかに聞ゆる言葉が聞えなくなると、消えて其形が見えなくなる。

浄『時致夢さめむつくと起き、四邊を見れども人もなく茫然として居たりける』

で俄破と起上り、右足から前に出て上下を見廻し束に立ち、右足を出して腕を拱み下手を見て、次に後向きに左足を出して上手を見込み、グルリと廻つて正面を向き、四邊を見廻して彌々夢であつたかと心付きタヂ〳〵と下手によろけ

兩手を擴けたまゝ、足を割り一寸上手斜になつて、

五郎『さては夢中に兄祐成、念力通じて危難を救ひくれよとの我への告げ、たとは ば祐經天へ登らば續いて登り、大地へ入らば同じく分け入り、日本六十餘州は目 のあたり、東は奥州外が濱』

浄『西に鎮西鬼界ケ島』

で下手の柱に柱卷の見得。五郎は正面に戻り、束に立つて、

五郎『南は紀の路熊野浦』

後向き、上手を見る。

浄『所は越路の荒海まで』

五郎『人間のかよはぬところ』

浄『千里もわけ』

五郎『萬里も飛び』

二足前へ出て兩手で、三つ叩き、平舞臺に飛び降り、

浄『イデ追かけんと時致が』

で二足大きく下手に出て飛六法やうの形で下手に飛んで行き、一寸止つて、一足大きく飛んで附際邊に立止り、後向きになり、上手奥を見込み、

浄『いきほひすゝむわりさまはおそろしかりけるしだひなり』

で家體に上り、大太刀取つて左に高く持ち上手を見て次に横向になり、左に刀を抱き込み、右手を上げて下手を見込む見得。

花道から夜具縞の着付で馬士が馬を引いて出る。

浄『馬付大根の春あきなひ、大根〳〵とうり來る、時致是をきつと見て、これ幸ひの裸脊馬、價は望にまかすべし』

で五郎は後向になり、刀を押し、正面を向き直り、

五郎『馬を貸せ〳〵』

右手を出し上手斜に立ち、

浄『其の馬貸せよと近寄れば』

で五郎は下に降り、舞臺の中央に來れる馬士と馬の間に入り。

浄『馬士も氣折つて狼藉なり』

で馬士を上手に突き飛し、馬の手綱を取つてグツト上手を見込む。馬士は上手に倒れる、馬士は起上り、片肌抜いで藍地に絞りの襦袢を現し、

馬士『商馬に乘んずとは、びやくらいならぬ、ならないぞ』

ト五郎にかゝつて來る。

浄『といふ所を引つかんで七八間、エイやと人礫』

で馬士は五郎の左の手を取る、五郎は輕く拂ふ、馬士は五郎の左の腰を取る、押戻しがあつて、五郎は馬士の襟首取つて下手に投げる、馬士は又、五郎の方にかゝつて來て、五郎の右の手を取り、五郎が拂ふので右の腰を掴む、五郎は

馬士の襟首を取つて上手に投げる、馬士が上手からかゝつて來ると、五郎は襟首取つて下手から上手にグルリと一廻りして、正面向きに馬士の右手を取り畫面の見得とゝ五郎は馬士を下手垣根に投げ込み、馬の轡を取つてグルリと上手に一巡して、二重にわがり、一本の大根を鞭の代りに取つて他を前へ落し、ヒラリと馬に乘る。

浄『手綱おつとりひらりと打乘り、手頃の大根千里の鞭』

で揚幕の方をキツト見込み。

五郎『すぐに行けば五十町』

で大根で馬の尻を叩く。

浄『廻らば三里三ケの庄、宇佐美久津美河津が次男』

で大きく下手から舞臺を一巡して元の位置に戻り、又大根で馬に鞭打ち、揚幕をキツト見込んで、

五郎『曾我の五郎が曲馬の程を、これ見よや』

で、馬は勇しく駈け出し、又いきり立つて後戻りする。

浮『工藤が館へいそぎしは、ゆかしかりけるしだいなり』

で馬は上手向き五郎は右手を高く上げ左手に大根を振上げ揚幕の方を見込んだる畫面の見得。

木の頭　幕

『暫』の型

『暫』雑話

○『暫』の狂言は正德四年十一月中村座大名題「萬民大福帳」に、二代目市川團十郎鎌倉權五郎景政と云ふ役名で、はじめて角鬘、素袍納豆、えぼし、大太刀のこしらへにて、しばらく、しばらく、しばらくと三聲呼んで出たのが、吉例となつて、以後代代其型で勤めるやうになつたのだそうだ、狂言の世界もいろ〳〵に仕組み、つらねは大抵其の時々の自作である。

○海老藏の『暫』と阿蘭陀人に就て面白い話がある、次の手紙を見ればわかる。

天保はじめのころ、本所御臺所町當時小泉町に舊幕臣御普請役高三十俵三人扶知通辯大塚勝三氏といへるあり、其勤役中に本石町に阿蘭陀屋敷と申すところあり、外人長崎へ着、それより江戸表へ呼び出し候場所にて、卽ちカピタン通

辯阿蘭陀人附添ひ到着す、此の時市川家七代目市川團十郎を見度よし申し出で候に就き、早速市川家まで申し入れ候ところ、直ちに承諾なし、翌日大塚氏には娘御一人、僕一名を連れ、又た朋輩なりとて私父富三郎と申すもの同道致し候よし、團十郎は自分宅より本石町へ參り、さて面會せしに、カピタンには篤と面上を見て、市川團十郎には相違のよし申し張り候につき、此方正銘のものゝ趣押て申聞け候へども、得心仕らず、其中カピタンには隱しの中よりしばらくの錦繪を取出し日本渡來の以前より久しく祕藏の品なりとて叮嚀におしひらき我が面會したしと樂みにせしは此の團十郎なりといひつゝ連りに引合せ見候ほどに、一同もつともとぞんじ便ち人を遣はし候て烏帽子太刀大紋其他化粧道具一切取寄せ、錦繪のごとく出立ち、舞臺同樣見せ申し候ところ、カピタン手を拍つて大いに喜び、團十郎へは即座の御禮として羅紗二卷を贈り候、其節大塚氏の娘御黄八丈の着物を着せたる人形を懷き居られ候をカピタンいかにも所望いたしたきよしにて、大塚氏へ申し入れ候に就き早速遣はされ候ところ、是れも殊の外に喜び候て羅紗一卷を贈り候。

右のこと追々吹聽に相成り、烏帽子大紋は狂言に用ひ候は差支へ之なく候へども平常用ひ候こと相成らず候、然るを御役柄をも勤め、不行屆の段御沙汰にて大塚氏へは隱居を申し付けられ、家名實弟清左衞門へ相續いたさせ候。（下略）

通辯をした大塚氏は權十郎の親類に當るとは頗る妙である。

○九代目團十郎が『暫』を演じたのは元治元年の春に一丁目にて出し、其後明治十一年十二月に新富町で出した、第三回目には二十八年十二月に木挽町で出した、それが團十郎の暫の最後である、女暫は今の歌右衞門もやつたが、四十三年十一月吉右衞門が市村座で出す迄は、十六年間打ち絶えて居た狂言である。

○團十郎が三回目に歌舞伎座で演じた時は、前回にやつた茶番めいたことは一切ヌキにして、ツラネも櫻癡居士の手にて多少修正を加へた、殊に大福帳の件を書

直し團洲は暫を演ずるにつき、衣裳かつら類、すべて新調した、素袍(麻)のみでも切地の五反も要つたそうだ、尤も太刀腹卷胛手等は、二代目團十郎の用ひたものを、其儘使つたそうな。

○此の時の役割は、暫(團十郎)受(權十郎)狂言廻(新藏)腹出し(壽美藏、八百藏、猿之助、猿藏)であつたが、當時の評判は非常なもので、初日を十一月十一日に出して翌月の九日まで打ちつゞけたが、流石に名優が家藝を演ずる事とて人氣湧くが如く、日々の賣切れで千秋樂まで客足が落ちなかつた、此の千秋樂の日に一番目の『大阪陣諸家記錄』はそゝりがあつたが、暫だけは至難しい役とて誰も代つて演る者がなく、矢張り團十郎が勤めたので、其日の見物は大喜びであつたと當時の評判記に記してある。

○此の千秋樂の日には、座主千葉氏團十郎其他の俳優の希望で玄鹿館が寫眞機四臺で七千燭の電氣燈を東西兩桟敷其他に据ゑ附け、電氣の都合で、二番目を先に廻して中幕を切に殘し暫の元祿見得の舞臺面を寫したが、曾て千歳座に於て演藝協會演習の折、マグネシヤを用ひて撮影したる事もありしが、興行中を撮影したるは、實に此際が嚆矢である、西洋各國にも未だ此擧あるを聞かないと其當時の評判記に誇つてある。

○又此時團十郎は久し振で暫を演ずるのだと祝つて、新調の扇を各贔負先へ配付した、其扇面には梅と牡丹の折枝の中に、鳥居風の暫を描き裏には市川團十郎述としてしばらくのつらねを書し、次に初代團十郎才牛述として大福帳の文句を記し、櫻癡居士の筆で、末に『讓られた太刀拭はゞや霜日和』と九世三升の發句が書いてあつた、包紙は草色の鶴菱と梯の三升を曙染にしたもので、別に奉書紙に書いてある文句は、

初代市川團十郎元祿十年正月、大福帳を演じたるがしばらくの始にて、同十三年第二回を演じ候ひき、夫より代々相傳して、家の藝と名付け、既に百年前

までは毎年顔見せに是を演じて吉例と致し候ひぬ、其疎豪にして諧謔なる、以て昔時江戸男兒の氣風を知るに足るべきか、秀今この劇を演ずるに鑑み、併せて祖先自作のつらねをも述べ、其の紀念として尊覧に呈し奉り候。

九世市川團十郎堀越秀謹言頓首

○歌舞伎座の茶屋三州屋の悴四郎と、梅林の伜は其頃十二三の惡戯盛りで、學校を下ると直ぐ歌舞伎座の大部屋へ遊びに行つて居た、ある日團八、升藏、團七等が三州屋の伜に例のいかめしき暫の隈を、又梅林の伜に怖はらしき公卿惡の請の隈を取り、しきりに團十郎と權十郎の身振り聲色を使はして喜んで居たが、子供の事とて親達に見せたいと云ふので、團八は兩人にいひ含め、二番目幸兵衛内の場幕明中に、ひつそりしたる勝手口からソツト物蔭に忍ばせ置いて、同家の女中が勝手に來る一刹那ヌツクと出て二人が齊しく見得一番をしたので、女中は大に驚きキヤツと聲立てゝ店の方へ逃出した、聲を聞きつけ、澤山の家内が集つて見れば、四郎は得たり顔で、『惡くそべエるゝと回向院へほうり込むぞ』と力身かへつて團十郎の聲色を使つたので、一同大笑ひになつた事がある。

○『暫』を演る者は市川家の許を得た上に、素袍、大太刀、合引、後見、湯呑の五つを借受けるのが市川家の古例だそうだ。

○吉右衛門の話には、此の役は昔の型に少しでも違つてならぬのですから、唯教はつた通りを一生懸命に演つて居るのです、アノ高い繼足を履いて歩くのは腰の加減一つです、ハラと云つて申上げる程の事もありませんが、何處と云つて一分も油斷は出來ぬ役柄です、今度演ります暫は九代目が最初に演られたのと、最後の時のとを加せて演つて居ります云つて居た。

役人替名の次第

參考の爲に明治十一年十二月新富座で九代目團十郎が演じたのと、四十三年吉

右衛門の市村座の十一月の顔見世狂言に演じたのと對照して記す。

市村座		新富座	
一御厨の三郎將頼	猿助	一玉の助	
一常陸の助雅近	雷藏	一市勝	大谷門藏
一左衛門佐維衡		一法印成田釋杖	蟹十郎
一蘆原四郎將平	紋三郎	一作者勝見調三（今度は藤井蘆助）	三津五郎
一鹿島入道雷玄	團右衛門	一上平太貞盛	榮三郎
一平親王將門	新十郎	一館金剛丸照忠	吉右衛門
一武藏九郎興世	梅五郎	一老女吳竹	團十郎
一村岡五郎義秀	勘彌	一下總介義廣	菊五郎
一公綱妹ひさご	駒助	一法印成田釋杖	仲藏
一貞盛妹桔梗の前	竹三郎	一作者勝見調三（今度は藤井蘆助）	鶴藏
	芙雀	一上平太貞盛	半四郎
	粂三郎	一館金剛丸照忠	小紫

本舞臺一面の廻廊の道具、紅白梅の釣枝、すぐ早渡りになり、奴八人、梅の花槍をもち、花道に止り、奴一『吉例かはらぬ芝居の正月、一番馬に魁かけて』奴二『渡りぴやうしの鳴物にて同じ出立の一對奴』奴三『ふつて振り出す花槍の、赤きは酒の呑仲間』奴四『大手馬場先下馬先のにしんの煮附筒茶わん』奴五『ぐつといつぱい二合半ぶんぬき釘ぬき看板に』奴六『寒の師走も日の六月もお供廻りを待兼て』奴七『素槍毛槍に作つたるお髭のちり取機げん取り』奴八『名を鳥毛より新らしく、

けふを花なる伊達道具』奴二『勇みいさんで』奴八『捻こむべいか』で早渡りになり一同勇しく舞臺へ來て下手寄で上手向に、右で槍を突いて棒に並ぶと管絃になり上手奥から敵役四人出で來る、敵一『これはいづれも御苦勞〳〵いつも鳥毛といふ所を』敵二『平氏を現して紅梅の花槍とは出來たわい』敵三『何さま今度常陸より寫せし鹿島の社頭にて』敵四『平親王將門公には王公を出て遠からねば』敵一『金冠白衣を身に着し自から登る位の山』敵二『首尾よくいけば我々も立身なして月卿雲客』敵三『けふ一日に何もかも一時に納る御位定め』敵四『それを祝して花槍とはコリャきついもので』四人『ござるわい』ト時の太鼓になり敵役二人半素袍股立大小にて花道より出る、爰へ新相中の仕丁花道より弓矢をつがひ先に立ち跡ずさりに出る、常陸之介社祢大小、桔梗の前廣ふり袖姫のこしらへ老女吳竹、義廣社祢大小にて出る、續いて腰元四人、新相中の仕丁同じく二人弓矢をつがひ、敵役二人半素袍大小にて附添ひ出る、敵役は立役を圍みじり〳〵と舞臺へ來る、立役一同下手寄前に並ぶ、その後に腰元、奴は其後に並ぶ、半素袍四人『そりや』仕丁『うごくな』常陸『コリャいづれもまづまたれよ、いかなる落度あつての事か、常陸之介雅近へ仔細も云はず此狼藉』桔梗『將門公には我意につのり、日の御神も恐れたまはず、吳竹『猿島郡に內裏を築きみづから位につきたまひ』義廣『さながら天子の形相とはいか成る天魔の所爲なるか』腰元『何科もない姫君はじめ』腰元二『雅近さまや義廣さま』腰元三『數なりませぬ私共迄』腰元四『とり子になせしは』皆々『何故ぞ』上手に聲あつて、將平『イヤ其仔細』義秀『いひ聞かさん』立役『なんと』管絃になり、上手より蘆原四郎將平、村岡五郎義秀、赤塗社祢大小にて出づ。

將平『兼て主人將門公心を掛し桔梗の前、御身を此場へ呼びよせしは』義秀『今日最上吉日故、當鹿島の新宮にて、將門公には卽位の儀式』將平『卽ち關東八箇國も、君と打仰げば桔梗の前を妻にするのだ』義秀『まつた雅近はじめ皆の者お味方致すか致さぬか、其心底の知れざるゆゑ』敵二『力者を以て弓矢の遠卷』敵二『斯くなる

上は桔梗の前』敵三『君の心に隨つて』敵四『妻になつたが身の仕合せ』敵五『雅近、義廣兩人も隨身いたすが先づ當世』義秀『ふたりのものも一同に此の場に於いて』皆々『お味方申せ』立役皆々思入れあつて、雅近『淺間しき將門公、其身位に高きと、平親王と自ら名乘る、天子にひとしき振舞と、ほのかに取沙汰聞たるゆゑ』義廣『及ばぬ迄も諫言いたし、正路に還し申さん爲』臭竹『とり子となつて來りし我々、いかで惡意に隨ひ申さん』桔梗『みづから事は幼ない時滿仲さまと言號にて、定まる夫のある上は』臭竹『貞女兩夫にまみえぬ掟、何とてお隨ひなされませう』桔梗『かしづく者は猶の事、いはゞ朝敵よこしまの』腰二『御企ある將門公』腰三『ものかずならぬ私共でも』腰三『お隨ひ申しませねば』腰四『はや〳〵お心ひるがへされ』桔梗『御むほん止まりたまふやう』皆々『願しうぞんじまする』將平『關八州の司なる君の仰せをもどくのみか』義廣『けふ御位の我君へ、さまたげなさん所存ヨナ』敵一『隨身なさねば雅近はじめ』敵皆々『命の瀬戸だぞ』雅近『スリヤ何故に』將平『何ゆゑとは横道もの、洛中守護の常陸之介』義秀『其大切なる身を以て、内侍所におとらぬ名鏡』敵二『なぜ山鳥の鏡をば』敵三『守護なす身にて』敵皆『失ーなーつた』雅近『ヤー』將平『ナント云ひ譯』敵皆『あるーまいゝーがな』雅近『ムウ』義秀『桔梗の前は我主君』敵二『將門公に隨はねば』敵三『則ち仰せを背く大罪人』敵三『それに從ふ腰拔武士』敵四『ふびんながらも女郎までも』敵三『可愛さあまつて憎さが百ばい』敵二『君の御前へ引立る』敵一『そこ一寸も』敵皆『動くまいぞ』雅近『スリヤどうあつても』立皆『我々を』將平『命が惜くばお味方いたすか』雅近『サアそれは』義秀『但しは色よい返辭を致すか』雅近『サア』敵二『サア』立皆『サアー』サア〳〵の詰合ひになり、將平『雅近返事は』敵皆『どうだエ、』

この時後にて、呼び『出御ー』雅近『ヤアあの』三役一同『聲は』呼び『出御』で上手出

語り座に長唄富士田音藏三味線杵屋巳太郎の大薩摩になる。

唄『漢宮萬里の花の時、榮花は雲の上もなく、月日もこゝに彌高き、時の威勢ぞ

類ひなき』と唄が切れると、早下り葉音樂入になり、
呼び『出御――』で知らせの二挺入りで、正面の廻廊を左右に引割ると、高二重、
三段の石段、二重の眞中に金かな具付の二疊臺、この上に平親王將門、金冠白
衣の拵へにて、笏を持ち、高合引にかゝる、其下手に御厨の三郎將頼赤塗社祢大
小股立にて朱の日傘を將門にさしかけて居る、其下手に鹿島入道雷玄鯰坊主の拵
へ、其下手は法印成田が山伏姿、將門の上手に公綱妹ひさご厚綿の羽折、鯰女
の拵へにて、梅の枝に紅絹のくけ紐にて、ひやうたんをゆひ附たるを左の肩にか
つぎ、高合引にかけて右の袖を引張り一寸上手斜の見得。
立役『ヤ、これは』將頼『御前間近く卑陋な奴』敵皆『さがれエ、』で管絃になり、
將門『既に青雲の時至つて、相馬小次郎將門も、關八州を切隨へ、遠からずして六
十餘州我手に握る幸先祝し、今日唯今當社にて、金冠白衣を身に着し、自から名
乘る平親王、我にさからふやつばらは、罪を糺して刑に行ひ、日頃の望たんぬる上
は、皆萬歳を唱へろやイ』敵皆『ハアー』　ひさご『君の御威勢誰あつて、背く物なき
綸言に、いづれもさまのお叱りも、女だてらな鯰とは、どうしたひやうりの瓢箪
を打かたげたる伊達姿』將頼『雲井の花の魁に、室の紅梅赤々と仕なれぬ役も御ひ
いきの、御指圖請て、御厨三郎、勝手の知れぬ御目見得にやう〳〵參上參内傘さ
しかざしたる天が下』雷玄『共につらなる入道はいつもかはらずのらくらと、酒に
たわいも鯰雷玄』法印『其入道とは免れぬ仲、少しはホラも福は内、すゝめる手の
者かまじめは、何時も出て來る成田釋杖』將平『今日唯今萬乘の君と、うやまふ慶
賀の御即位』義秀『草木もなびくお威勢は、ひとへに君の御高運』敵二『唯々お目出
度う』敵皆『存じ奉り升る』鳴物とまり將門桔梗の前を見て、
將門『六十餘州を掌握なさん祈念の爲に、此社に我生贄を備へんと、けふ汝らをと
り子となせしが、いともなまめく桔梗の前、命をとるもふびんゆゑ、命助けて閨
の伽、男子も我に隨ひて、忠勤はげむものならば、餘人に替て助けくれん』立役

皆々顔見合せ、雅近『情なき將門公、姿許りか御心迄、聞しにまさる惡逆無道』桔梗『たとへ上なき君の御末なりとて、けふ御位の式を行ひ』吳竹『みづから位に登り給ふは日の御神へ恐れあり』義廣『それのみならず、過し頃都において失せたりし』腰二『世にも稀なる山鳥の』腰二『其御鏡も御手に入り』腰三『御所持なさると申す事』腰四『あしきことは洩易く、誰知らぬものはなし』雅近『其御鏡をお歸しあつて、再び逆意をひるがへし』桔梗『元の正意に歸りたまはば、おのづと天下平穩に義廣『萬民こぞつて』立皆『悅び申さん』

將門思入れあつて、將門『やア我へ對してつのめだつ慮外な奴ばら一人々々に、此場に於て成敗なせ』雅近『スリヤ我々を此場にて』將頼『成敗いたす覺悟いたせ』立役皆『あまりといへば』將平『やア出て再びかへらぬくり言』義秀『仰せそむきやア』敵皆『成敗いたすぞ』立皆『手出しもならぬか』將門『我にさからふ不敵の奴ばら、武藏九郎を是へ呼出せ』將平『ハツ畏つてござります』將平は立上り、將門の前に會釋をして通り、附際迄來て衣紋を直し、將平『ヱヘン、車舍りに控へたる武藏九郎與世、急いで是へ』向ふ揚幕の内で、與世『畏つてござります』で岩戸の鳴物になり、將平は元へ戻る、向うより武藏九郎與世、赤塗立社祢大小股立にて出で來り花道七三に止り、一寸將門の方に辭義をする。

將頼『君の愛臣武藏九郎與世』義秀『唯今出仕』敵皆『召れたか』與世『ハア、お召に隨ひ一陽に』で頭を上げ、『おつぴらいたる寒紅梅、顔に紅差すやつゝら見せ、歌舞伎の春の吉例に、武藏九郎與世が、これまで伺候』で右の足を後へ引て心持左へかゝり、『仕つてござる』で兩手を突出し、辭義をする、將頼『諚意に逆ふこれなる奴輩、首ぶち落す用意召され』與世『君命反く奴輩の、首打落すに』で束になり、『何んの手間隙、覺えの刄研ぎすまし、疾より控へ居つてござる』將門『皆一同にそこへ出て、首打ち落す用意をいたせ』腰出し四人『畏つてござります』

將頼、義秀、將平の三人は高二重の上で、與世は花道で、銘々立上り、右左と草

履を後へ蹴り、右左と上下から着付の肌を脱いで腹を出すと前の鳴物の止り、腹出し四人『やつとことつちやア』で左を踏出して元へ戻し、更に右を踏出し『うんとこな』で左にかゝり、股立を取る心で右の褄先を左へ掴み、右を添へて左へ引いた見得、三保神楽になつて、二盤臺を上手へ引き、雷玄、ひさご、法印は平舞臺に下りて上手にひさご、雷玄法印と居列ゑ、高二重には興世、將頼、將平、義秀の四人が將門の下手に並ぶ、其後に刀持ちが並び、平舞臺下手前に立役四人、常陸之介、桔梗の前、吳竹、義廣の順に並ぶ。

將門『彼等の首を肴にして、イザ〳〵九獻をめぐらさん』雷玄『ハヽア』と大盃を持つて將門の前に行き、『イザ我君には』ひさご『お酌を仕りませう』梅の枝の下に置いて、銚子を持つて酌をする。

立役皆々科あつて、雅近『ア天に風雨のうれひあり』桔梗『月にも蝕の影くらき、花に嵐の情けなや』義廣『よこしま非道の振舞に』吳竹『我々のみか姫君まで』腰一

『御いたわしき』腰皆『此場のしぎ』雅近『是非もなき世の』立皆『ありさまぢやなア』將頼『此期に及んでよめへ言、イデ素首を打落さん』興世『今が最後だ』腹出し四人『觀念ひろげ』といふ。

將門は大盃で酒を飲まうとする、腹出し四人は束になり大太刀を振冠つて抜きかける、敵役皆『ドリヤ』といつて屹度見得。

此時向ふ揚幕の内より、

照忠『しばらく』と大きく叫ぶ。

敵役皆々『イヤア』と思入れ、將門は盃を落す、腹出し四人は太刀を鞘に納めて左に提げ、揚幕を見込んで、

興世『兼て覺悟はいたしてをるが、今暫くの聲を聞て、首筋元がぞく〳〵いたし、流行風でも引かにやアいゝ』將頼『拙者抔は師匠から話しに聞た暫く故、早く見たいと思つて居るが、お手まへ方の容子といひ、足の裏がむづ〳〵いたして、氣味

がわるうござるわへ』將平『なんにいたせ我々抔は、まだたべつけぬ事なれば、胸がどき〳〵いたしてならぬ』義秀『さやう〳〵身共抔も久しぶりで、今暫くの聲を聞き、下つ腹がぴんと申した、』ひさこ『ほんにそうでござんすナ、あの一聲は地震より雷さんより怖うござんす』雷吉『こはいは誰より此入道、おこり病を見るやうに、總身が、がた〳〵ふるへ出し、いでう齒の根が合ひませぬ』法印『此の法印も久し振りで今暫くの聲を聞き、膽玉がでんぐり返つた』將門『我に敵たふやつばらを、刄の錆となさんず折から』敵二『是ぞ歌舞伎の吉例ながら』敵二『耳をつらぬく今の一聲』敵三『そも暫くと』敵四『聲をかけたは』敵皆『何やつだヱ、』又揚幕で、照忠『しばらく』と凛とした調子で叫ぶ、敵皆々『しばらくとは』揚幕で、照忠『しばらく、しばらく』を早間に力を籠めて一息に云ひ、次に一寸間を明けて、照忠『しばらブウ』と市川流のブル〳〵〳〵と大きく長く引張つて吹く。

大薩摩になつて、唄『かゝる所へ、館の金剛丸照忠は』で、揚幕から米吉の後見、袋付の羽織、紋付の着付、麻社衣、白足袋で高合引を持つて來て、七三に置き、花道スッポンの西の土間へ來て蹲む、大小寄せになると、アリヤ〳〵の聲よせになり、向うから館金剛丸照忠、髮はお約束の前髮附車髮、これに力紙、顏の作りは市川流の筋隅、侍烏帽子、萠黄の縣緒です、白地に萠黄に蝶々向ひ合せの菱に金絲縁縫ひの綿入の着付、紅の下着、白純子大鞘形の襦袢、襟に紅の二枚を襲ねる、黑のゴロ本丸グケの帶、吉例柿の三升大紋の素袍、素袍の袖は張の爲に籐を入れる、襦袢の上に紫と淺黄の絹絲の褌を縣ける、三升鍔の大太刀を腰に提げ、素袍を袖の右を上に合し、顏を隱し、腰を屈め乍ら刻み足で揚幕から四五足出て立止り、一寸土間の方へ向き直り又、大きくゆつくりと舞臺の方に向き直り、腰を伸して顏を上げ、袖は前で搔合せた形で、靜々と足んで、スッポンまで來て正面に直り高合引に掛け、一寸兩袖を捌いて唄『素袍の袖のたぶやかに、實に鳳凰の羽づくろひ、いさましかりける次第なり』と此唄一杯に極る、皆々『エ、ー』將門『今卽位

の儀式と是なるやつ原、重き刑に行はんと』将平『すかゞべ落す向うから』興世『しばらくと聲をかけ』将平『のたくりつん出たわつぱーめ』義秀『そもまづうぬは』皆々『何やつだヱ、』といつても照忠は默つて居るので、将頼『イーヤーサー』で首を振ると同時に、腹出し四人共右を踏出してそれに掛り、左は太刀を提げたまゝ右の拳は握つて前へ突出した形で（つらねの間は此の形をつゞける）敵皆々『何やつだヱー』吉例のつらねになり、照忠は土間を向いたまゝ 照忠『莊子に曰く、（間）北冥に魚あり、其名を鯤といふ、化して大鳥（高く張る）と成る（を落す）其つばさ垂天の雲の如く、一度南にせんとほつする時は、水擊三千里扶搖に搏て上る事（高く張る）九萬里とかや（低く圓く高く、低く又高く低く）柿の素袍の羽づくろひ、氷らぬ水の筋隅は、根元金剛家の株、其本家から許された、素袍出立も覺束な（低く圓く高めて低める）名乘り（鼻に拔いて低く力をこめて云ふ）を揚羽の蝶々しい（成田屋の聲色、鼻に拔いて分別臭くメリハリをつけて最後を強く落す）此の身に重き大太刀や、大きな眼玉（高く張る）の眞似事は（高く張つて尻を上げる）親の光りとお嵐負を（高く張る）（顏を一寸下げすぐ上げる）頭に頂く力紙、強いが自慢（高く、低く高く上げる）負ぬが得手、抑姓は平氏の正統、常陸の掾貞盛が、股肱耳目とあまやかし、もてあましたるやつがれは（低く云ふ）館の、金剛丸（一寸張つて）照忠、當年積ッて十八年、も一つ歌舞伎の十八番、二ッ合せて三十六鱗、鯉の荒磯（低く、ゆるく圓く高めて、低く）の荒事師（強く張る）やつとことつちやア運は天（上げる）天とたまらぬ向ふ面（強く棒に張る）今日初役の御目見得から、大きな寢言を富士筑波（上げて低め上げる）江戸紫（圓く上げて下げる）のこんげんわかしう（高く上げ棒に云ひ、次に掬ふやうに低めて上げる）ほゝ敬つブウル〳〵〳〵申す（高く大きく云ふ）』

揚幕から米吉の後見が湯呑を持つて出て、前から一口呑ませて入る。

皆々『どつこい』将頼『サアいづれもしばらくだ〳〵、根元歌舞伎初まつてより、東

の名物暫くの本店、いづれもそつ首用心さつしやイ』皆々『イヤア』將門は照忠を見て、將門『今暫くと聲をかけ、つん出たやつを能見れば、見覺えのある鬼若衆、名に大太刀に三升の紋、柿の素袍は本家本店、外に類ひも荒事師、是ぞ日本市川家の十八番の暫くだが、此將門が目ざはりゆゑ、誰かある引立イ』興世『イヤ君の仰せをまたずとも、大福餅でも早くやつて、ぼつかへすのが一の手だ、身共抔も久しぶりゆゑ一倍きもに答へました』敵二『コリヤいかゞいたしたら』敵皆々『能ざらう』將頼『いかがといつてお目障り、早くあつちへ遠ざけ召れ』ひさご『サア皆さんいつもの通り御苦勞ながら、引立が來ましたぞへ』皆々『イヤア』興世『まづさしわたる將頼どの、以後の勝手を覺える爲』將頼『ヲ、引立に參れとか、行まいものでもないが、先誰彼といはうより、噂に聞たいつもの吉例、入道どのお出あひなされ〳〵』雷玄『したり(間)ム、よし〳〵仕やうがござる〳〵、吉例とあれば是非がない、勝手は違ふがやつて見ませう』敵役『手並の程が』敵皆々『見たいナ〳〵』

雷玄は拳を握つて下げた形で眞中へ出て立上り、雷玄『まてよ、安受合に出は出たが、勝手は違ふし力はなし、所詮唯では立ち去るまい、とあつて後へは歸られずア鯰にいんでは此胸が』『すまアぬ』と一寸唄つて、雷玄『イヤ我ながら惡い聲だ、なにか工夫が』を世話に云ひ腕組をして三足程上手へ行き、雷玄『ム、よし〳〵仕やうがあるわへ〳〵』と手を打合せて二足程戻り、ひさごを招く、ひさご前へ出る、雷玄『コリヤおまへに限る役だ、男がいつてはいけぬから、なんとかかとか和らかに、一番だましてお歸しなされ〳〵』ひさご『どうしてまア殿達の後込みするをなんでわたしが』と逃げやうとする、雷玄『ハテそないいはずと行かつしやい、おれが敎へてやるほどにござれ〳〵』とひさごの手を取り無理に出る、敵役『イヤお手柄のほどが』皆々『見たいナア〳〵』雷玄『ドウリヤア〳〵〳〵』と右、左、右左と前へ出て、雷玄『わつば奴そこを』で右を踏出してそれに掛り、『立てエ、』と鯰髭を兩手で持つて肱を折り、左は稍上げて、右は稍下げて後へ引いた形で云ふ、

『とサアなんのぞふさもない事だ』とグット世話に碎けて云ふ、ひさご『それじやといふてわたしが』雷玄『ハテ氣のよわい、後には此入道がひかへて居る、氣をしつかりとやつたがよい』ひさご『それじやといふてわたしには』雷玄『フいはれぬなら附て遣う』と後から手を持添へて『どうりア、どうりア〜〜〜』といひ乍ら、左右、左右、左右と前へ出て、ポンと背を突くと、ひさごはよろけて、照忠の傍に行き、右手を鬢に掛け、恥かしき科、雷玄は後から兩手で煽る、ひさごは輕く膝を打つて照忠の傍へより思入れあつて跡へ歸らうとするを、雷玄早くしろといふ思入れ、是非なく傍へよつて、ひさご『どなたかと思つたらこれは播磨屋の兄さん』で下に居り、『此寒いのにようござんしたな、それはさうと妾やお前にちつと頼みがござんすが、何と聞いては下さんせぬかエ』照忠『コリヤ誰だと思つたら、音羽屋の姉えか、先へ引立とはじやうだん餘を押へましよう、さうしておめへは何しに來たのだ』ひさご『皆さんたちのおすゝめに、爰迄出たは出たものゝ、女達らに立エ、（世話に碎けて）でもござんせぬ、（間）どうぞわたしの顔を立て、我儘いはず、おとなしう、そつちの方へすこし許り』照忠『顔を立てくれろといふは、揚幕の方へ寄つてくれろか、外でもねへおめへの事だ、今年は一番（フックリ高く）あたらしく』ひさご『ハイ』照忠『揚幕の方へ』ひさご『ならうことなら』照忠『立てやらうといひたいが、いやアーだ、（大きく高く）早くなくなれ、なくなりやうが遲いと鹽を附てかじつて仕舞ふぞ、ひさご『エ、』とびつくりして雷玄を招く、雷玄『どうだな〜』とひさごの傍へ來てどうだと云ふ思入れ、ひさごいけぬと云ふ心でかぶりをふる、雷玄『それでは仕方がない、ようござる〜』『どうりア〜、〜、〜、〜』と大股に花道へ行き、雷玄『キリ〜其所を』で拳を握つて右の臂を折つて前に構へ、左は握つて後へ伸した形に氣組む、照忠『どうしたと』でぐつと睨む、雷玄は振上げた拳を二つ廻して、蹲み乍ら腕組をし、雷玄『一つとや』で嶺唄の合方になり、右から飛び乍ら戻

ると、花道附際に待つて居たひさごは兩手で鞠の心でつき乍ら下ると、雷玄は前の形、唄『一夜明ければ賑かで〳〵、お飾立てたら』でひさごは片手で突く、唄『松飾りイ〳〵』でトンと踏むのが前の合方の止り、腹出し四人『エ、おかつせえナ』雷玄『イヨー』と頭を押へて元の處に戻る、雷玄『サア是から法印殿』法印『是は又迷惑今日の儀式を邪魔する奴、眞言祕密の法を以つて、唯一祈りに退散させん』法印『どうりア〳〵、〳〵、〳〵、〳〵』と右、左、右左と前へ出て、法印『ヤイわつぱめ、愚僧が覺えの金しばり、不動の利驗を見せてくれん』で祈りの合方になり、大きく兩手を擴げて珠數を繰り、法印『ノウマクサンマンダア、バアサラダア、センザン、ナアマクバアサン、コロンダンウダ、隣のおかみさん、ハランデ妙だ』と祈つても、照忠『エ、御めへの祈禱が利くものか』法印は無念そうに戻つて來て、法印『とても我等の手にはおへぬ、四人の衆たのむ〳〵〳〵』で元の處へ歸る。

敵二『サアこれからは我々だが』敵二『近頃なんぎな役廻り』敵三『是も吉例、是非ない事』敵四『四人一座で』敵四人『參りませう、どうりア〳〵、〳〵、〳〵、〳〵』と握つた拳を振り乍ら大股に花道へ行き、『さり〳〵其所を』で四人共足を踏出し四人『立てエ、』でそれに掛り、右の拳を握つた儘肱を折つて前に構へ、左の拳を握つて後へ伸した形で氣組む、照忠『うぬらなんだアー』で睨む、四人は足を戻し敵二『こいつが〳〵、山雀ではあるまいし』敵三『歸れなどとは無禮の雜言』敵三『人もゆるせし我々は』敵四『將門公の四天王』敵二『蟹から天王虎ヤア〳〵』敵二『日吉山王かん〳〵のう』敵三『祭萬燈樽御輿』敵四『天王樣ははやすがお好き』四人『ワイワイと囃せ〳〵』と飛び乍ら舞臺へ戻る、將頼『エ、置かつせえ』四人『イヨー』といつて上手に控へる、雷玄『サア是からお手前方だ』半素袍二『然らばどうでも、行かねばならぬか』半素袍三『併し首尾よく行く時は』半素袍三『御恩賞にもあり附く手柄』半素袍四『手がらはしたいが、氣味がわるい』敵役『エ、無駄を言はずと行かつせえナ』四人『どうりア、〳〵、〳〵』と大股に手を振つて花道へ行き、半素袍四『さり〳〵其

所を』で四人右を踏出し、四人『立てエ、』でそれにかゝり、中啓を持つ右の臂を折つて前に構へ、左は拳を握つたまゝ、後へ伸した形に氣組む、照忠『うぬらに引立られてつまるものか、わるくそばへ立ちやアがると、投込へほうりこむぞ』四人『所をおいらが』照忠『何を』ときつとにらむ、四人『囘向院佛せう』と云ふてすぐ〳〵舞臺へ戻る、上下四人『置かつせえ』二重の四人屹度成つて、將頼『ア、最前から用捨すれば、君の御前も憚からず』興世『慮外をひろぐわつぱーめ』將頼『イデ此上は御厨三郎將頼』興世『武野九郎興世』將平『蘆原四郎將平』義秀『村岡五郎義秀』將頼『イデぼつかへして』で兩手を開いて上げ、四人『くれべえか』で一寸右にかゝつて、左を握つて前へ突出し氣組む。

照忠『イヽヤ態々來るにはおよばねへ、おれが方から今そこへ行ぞ』敵皆々『イヤア』照忠『早桶の用意をしろ』皆々『イヤア』照忠『サラば御輿を（張つて）』で立上つて袖を揃へ、照忠『昇あげべいか』（底から起して來るやうに强く云ふ）で早鼓化粧聲、

『アリヤ〳〵〳〵』になり、しづ〳〵と歩いて舞臺下手へ、後向きに立上り、ゆつくりと着付を一枚々々脱いて、素袍の籐を抜き中啓を後見より受取り、白の純子の下着に紫と淺黄の絹絲の襷を見せ、右手に中啓、左手を握つて、兩方とも肱を張り、常陸之介以下の立役と上下に後から入代り、舞臺中央に來る、立役は元の居處に戻る、化粧聲『アリヤ〳〵』が早くなり、照忠は下手向き、右の中啓を後へ伸した形で早足にて、左の足を内輪に踏出すのが、化粧聲『アリヤ〳〵』の止り、左の袖を内へ引き、大きく氣込んで右の中啓を振冠るやうに上げる、元祿見得後見が後から素袍を擴げる、皆々『どつこと』と極る。

常陸之介『金剛丸お來やつたか』立役等『まつてゐたわいのう』照忠は正面に直り合引にかけ、左の袖をはねて兩手を開いたまゝで、照忠『照忠が來るからは大船にのつたとおもつて、まアおちついて（高く張上げて落す）ござエまし』立役皆々下手に坐る、照忠『トキに承はらうは何故あつて人々の首をはねんとおしやるのだ』

將門『ヤアあんがいなる金剛丸、地下の臣下でありながら階下を穢す慮外なやつめ』將頼『彼等が首をはねるのは、今日位に登りたまひ、一天下のあるじたる』與世『君の詞をそむきしゆゑ、死刑の罪に』皆々『行ふのだ』照忠『ソリヤ無理だ我儘だ（早く強く云ふ）』で將門を見上げる、皆々『とはまた何故』照忠『其の罪を糺さうなら先差當る將門公、金冠白衣はどこからの免しがあつて着さつした、（早間にキット云ふ）卽位抔とは、（底から鼻で押へて底力で云ふ）片はらいたし（低く、えぐるやうに高めて落し）誰がゆるしたか夫を聞たい（高く）』將頼與世『サアそれは』照忠『自儘に着たか』兩人『サア』照忠『サア』兩人『サア〜〜』詰合ひになり、照忠『誰だと思ふエ、、、、、カツカツ〜〜〜つがもねへ——』高く大きく言ふ、氣組んで右の足を入れ、中啓を逆に持つた右の手を下からグイ〜〜セリ上げ口の邊まで持つて行き左の肩の邊に當てゝ、其肱の下に右の手を反らして受ける。照忠『紛失なせし山鳥の鏡は、赤いおぢい達が大かたぽつぽにあんべいからおれに下せへ手へ〜〜仕ませう、將頼『なんでそれを』敵皆々『知るものか』照忠『うぬらが知らざア上座にござる平親王がしつてござらう、引ずりおとしてくれべいか』と照忠が寄うとするとどろ〜〜になり、照忠はたぢ〜〜と下手に下つて呆れて、思はず下手向きに俯向く、將頼『なんと將門公の』與世『御威勢を見たか』上手奥を向き、照忠『オ、見た〜〜、平親王の御威勢も、寶の有所ものこらず見たは』敵皆々『見たとはどこに』照忠『オ、爰にあるは』將門へ立かゝるを、ひさご『ア、モシ、其御鏡のお有所は、私が知て居るわいなア』と後へ向ひ、ひさご『お供の衆の其中に、貞盛さんが居なさんせう、お預け申したその品を、早う持つてござんせえなア』この時下手から仕丁姿で、貞盛『心得ました』と上平太貞盛出で來る、貞盛『お預りの山鳥の鏡ひさご樣より常陸之介樣へ』ひさご『私が預り居る時は、どうやら危う思ふたゆゑ、貞盛樣に預けた御鏡』と貞盛が渡す鏡をひさごは照忠に渡す、將頼『そんならうぬは廻しものか』敵皆々『エ、いめへいましい』將平『モウ此上はやぶれか

ぶれ』義秀『その御鏡を』と取りにかゝる、照忠『どつこいさうはいかねへぞ』イザ御鏡をお受取りなされませ』と云つて、鏡を常陸之介に渡す、照忠は合引にかける、常陸『眞に是ぞ、山鳥の御鏡、チエ、忝けない』といひ、袋に入れて左に持つ

將頼『扨は粟津判官が妹なりと申せしは、廻しものにてあつたるか』ひさご『いかにも粟津の判官が妹とは詐りにて誠は公綱が妹いさご』與世『シテ又そつちの童めは』眞盛『イヤ我は都方、將門謀叛と聞き、下部となつて仕込んだ工、將門方のウツソリども、何と肝が潰れたか』と屹度思入れ、常陸『ひとたび失せし此かゞみ』桔梗『ふたゝび味方の手に入るは』照忠『まるく納まる』義廣『此顔見世』照忠『目出度くひとつ〆べいか』立役一同『ヨイ〳〵〳〵、ヨイヨイ〳〵、ヨイヨイヨイ』と手を締る。

敵役『こつちも〆ろ』敵役皆々『ヨイ〳〵〳〵ヨイ〳〵〳〵ヨイヨイヨイ』と手を〆る、與世『エ、喧しいわへ』敵役一同『イヨー――』

將頼『將門公の大望も十ウか九ッ仕をほせしに』紋三郎絶句せしゆゑ竹三郎小聲にて、紋三郎『紋三郎さんおまへの番だ』紋三郎『何、おれぢやアない頭取だ』敵役『まだ〳〵わたしのせりふぢやアない』駒助『コレ狂言方は居ねへのか』と呼ぶ、下手から三津五郎の藤井蘆助、着流し狂言方の拵へにて臺帳を持つて出る、三津五郎『ハイ〳〵爰にをりまする』駒助『早くつけてやらねいのか』三津五郎『誰れにつけますのだ』新十郎『紋三郎さんだ〳〵』三津五郎前に廻つて腰を屈め、白をつける、將平『エこの街道はぶつさうと知つて合點のひとり旅えこそはかさじ出なほせ〳〵』竹三郎『それぢやおれのせりふがつかねへ』三津五郎竹三郎につける、竹三郎『さいふは千崎彌五郎どの』甚助『暫くの中請にそんなせりふがあるものか』三津五郎『オ、間違へた〳〵五段目の正本がふところにあつたから間違へてつけたのだ』甚助『イヤけんのんな狂言方だ』紋三郎『こんな人につけられたくない』駒助『いかに後からつけたつて人も知つてる五段目のせりふをいふやつがあるものか』紋三郎『すつかり

わすれて逆上てるところへ』竹三郎『つけられるからうつかり云つた』吉右衛門はハラ〳〵して居る心持ちで、腰を一寸屈め、竹三郎の白に冠せて、照忠『オ、、、、大事な狂言に疵がつくぢやねへか』とさも心配そうに云ふ。

雷蔵『誰がいふのか知れなくなつた』ひさご『たしか今度は成駒屋さん』將頼『なんにしろくりかへさう』と云つて、又時代に、將頼『將門公の大望も十をが九ッ仕をほせしに』將平『飛んだやつが出しやばつて』義秀『思つた事もいすかのはし』將門『方々控へい』とおも〳〵しく云ふ、敵皆々『ハ、、』將門白を忘れし思入れで將門『方々控へい』敵皆々『ハ、、』將門『方々控へい』敵役一同（變な顔をして）『ハ、、』と氣の乘らぬ返答をする。

照忠『それ喜之字屋が絶句した、早くいつて付けねへか』三津五郎『將門につける』將門かぶりをふり、將門『イヤそんなせりふは己はいはぬ』三津五郎『コリヤほんとうのせりふでござり升』將門『本統でもおれはいはぬ』三津五郎『へイへイ宜しいお前が言ずばわたしがいひ升』と三津五郎勘彌の聲色で『テモーさかしらわつぱが振舞、此將門に敵といふは、龍車に向ふ螳蜋と同じこと、今にほえづらかゝしてくれん』是にて將門人形の思入れで、白に合して身振りをする、將頼『此返報を』敵役皆々『まつておれ』與世『やうやく本道へ出たやうだ』照忠は冠せて、照忠『ヲ、何萬騎でも持つて來い、恂くともするのぢやアねへ』と上手向いて云ひ、一寸下手に向き直り『サアいづれもさまの御供して、金剛丸は立歸るが言分はあるめへなアー』（高く圓く落して高く）皆々『イヤ云ひ分は』で腹出し左を握つて出す、照忠『どうした』で正面向になつて、太刀に手をかける。敵役皆々『なーいー』照忠『イザお立あらせられませう』下手向いて、右手を擴げ、頭を一寸下げる、大薩摩になり、唄『さらば〳〵と日の本に英雄獨歩のその勢ひ、勇しかりける』の送りに連れて、常陸之介雅近、貞盛　妹　桔梗の前、老女吳竹、下總の介義廣、續いて腰元、少し後れてひさごは、右の肩に瓢箪を結んだ梅の枝を擔いて附いて入る、照忠は敬つた形

で見送り、後向きになる、一同が入ると、

照忠は下手へ行掛けると、將監『そりや』仕丁『やらぬは』仕丁『やらぬ』で手を擴げ照忠に上下からかゝる、照忠は塗身の刀を拔いて上下の仕丁一同を一時に、塗身の大太刀を左から大きく右に廻して首を落す、右の首脇から振冠り左の足を内輪に踏み出して大見得、仕丁ぶつかぶりになり投首を出す、將門『館の金剛丸』皆々『照忠』照忠『弱蟲めら』皆々『さらば〳〵』で、照忠は右に塗身をかたけ、左手の肱を張つて下手に行く、奴八人が下手からかゝるを、照忠は右左と拂つて千鳥に入代つて下手へ行く、奴は上手に列び、繋がつて腰を取る、照忠は大きく輕く左手に拂つて、其手で又も捕まへんとする奴の胸を突く、奴たぢ〳〵となり轉ぶ。

照忠は附際で反り返るのが片シャギリの掛りで花道へ行く、舞臺一同照忠を睨む見得、腹出し四人は大太刀を左に持ち、右を踏出して元に戻し、更に左を踏出して照忠と見合ふのが木の頭、改めて右を踏出して左にかゝり、太刀を振冠つて拔掛け、後に控へた畫面の見得、將門は二疊臺に立上り、笏を持つ右の袖を卷いて眞直に横に伸した見得、鯰坊主は右を踏出して左にかゝり、兩手で鯰髭を持つその上手斜の上下四人は、右を踏み出し左にかゝり、左で太刀を鞘毎に拔上げる形。

照忠は七三で一同と見合ふのが木の頭、幕を引く。

吉右衛門はヤレ〳〵と云ふ思入れで大息をつき、吉右衛門『まづお蔭樣でヤット大役を勤めました、そこで是から六法の眞似事を御覽に入れます』と世話の口調で頼むやうに云ひ、

揚幕の方へ向き直る拍子に、右を踏出し、照忠『オー』と勇氣のこもつた掛聲をして、塗身の太刀を左から右へ、一つ拂つて、右の肩に擔いて極ると、太鼓入りの勇しき飛去りの鳴物になり、照忠『ヤットコトツチヤア、ウントコナ』と體を振込み乍ら拍子を取つて云ふ、右の肩から振込んで首を三ツに一寸動かして右の足

を踏出し、塗身をかたげ氣味に、左手を開いて刀の鍔の邊の前に出し、次に左、次に右と同じ事を五六度此通りして、七三の邊りから右手で刀を擔ぎ左手を振つて揚幕を見込んで悠々と大きく入る。跡止めの木に付、シヤギリを打込む。

オセロとハムレットの型

電氣館でオセロを、錦輝館でハムレットの活動寫眞を見た。前者は伊國名優出演との觸込みだが、就らもまあ然うでないと思つて居れば間違ひはない。殊に脚色や動作に就ても物足らぬ處が少くはないが、併し外國俳優に依て演ぜられたる沙翁劇が、二つ迄も活動寫眞に依て日本に紹介される事は、珍しくもあり又注意する價値があると信ずる、それで大略の型を書いて見たのである。

オセロ

○第一場　門前の花園。上手からオセロとデスデモナが手を引き合つて、何か語りながら來り、中央の好き所に止り、兩人共上手を見ながら、デスデモナは嬉しそうに手を擴げてオセロに抱き付くを、オセロは靜にデスデモナの手を取つて、デスデモナの身體を前に廻して、兩人共抱き重つて正面向きになり、オセロはデスデモナを抱いたまゝ、右の手を握つて高く振り上げ、頭の上に當てゝ、下手斜

をキット見込み、デスデモナの額に接吻する。

○第二場　船中の密談。一艘の舟にイヤゴーとロテリコの二人が盛んに身振り手振りで話しながら、河流を溯る。

○第三場　僞りの注進。船中からイヤゴーとロテリコは丘に向つて話掛けて居る、丘ではデスデモナの父親が顯れ娘デスデモナはオセロに誘拐されたとの僞りの注進に吃驚して、盛んに手を左右へ振り振しながら、周章てゝ奥へ引込む。

○第四場　元の花園。オセロとデスデモナは抱き付きながら、オセロはデスデモナの頰に接吻して、互に嬉し氣に私語いて居る處へ、下手からイヤゴー來り、デスデモナの父親が此處へ立腹して來る由を告げる。オセロは當惑の體にて小指を口に當て、眉を顰めて心配する。デスデモナの頸に手をかけ、ジット見て恍惚として、デスデモナの手を輕く取つて抱き付き、接吻して右手を下に向けて振りながら、イヤゴーと共に去る、デスデモナは悲しげなる風にて振返り〳〵後の門内に入る。

○第五場　衝突の(1)　デスデモナの父親が、ロテリコを眞ッ先に大勢の從者と共に船から陸へ上り、オセロの方へ押かける。

○第六場　衝突の(2)　上手からデスデモナの父親も武裝せる大勢の從者を伴つて現れ、下手からオセロ二三の部下と來り、雙方氣味合になるのを右手を拳で強く振つて部下を止める、デスデモナの父親が決闘しやうと云ふので、オセロは手を開いて前へ突出し、二度ばかり下げる。

○第七場　議事堂の廊下。高官が大勢話しながら、階段を昇つて行く。其上り口に從者一人立つて居ると公爵が來り、前に右足を折つて腰を屈め、右手を上へ差し上げて挨拶をする、從者にオセロに宛てたる手紙を渡し急使を命ずる。

○第八場　衝突の(3)　愈オセロとデスデモナの父とが、決闘せんとする處へ、上手から使者來り手紙を渡す。夫は直ぐ議事堂に來れとの事に、其書狀を皆々に示

して、上手を指しながら入る、デスデモナの親も、〳〵上手を指し、激しく手を振りながら上手に入る。

○第九場　議事堂。大勢の高官が左右に別れて居列んで居る。下手の前端に公爵が腰を掛けて居る、其前に右手を擧げて蹲踞いて居る從者の奥へ引込むと、別の從者が正面の奥の入口から詔勅を捧げて來り、公爵の前に蹲踞いて後、公爵の右側に立つ。オセロ奥から出で來り、右手を胸に當て左手を高く上げて一同に會釋する。公爵がオセロに詔勅を渡さうとすると、奥から遽しくデスデモナの父親ブラバンシオが來て止める。オセロは手を開いて顎の邊を撫で、次に雙手を胸に當て、大きく擴げて又前よりも強く胸を打つ。デスデモナ來り、一寸愁の思入れわつてオセロに抱き付く。デスデモナの父は立腹の體にて、手を左右へ大きく振つて去る。オセロはデスデモナの手を取りながら、懷き抱へ、右手を公爵の前の方へ差し出し、デスデモナと離れて、公爵の前に蹲踞き、右手で詔勅を受取つて尖端の方を左手が持ち添へ、詔勅に接吻をして垂直にして左手に下げ立ち上る。夫を見てデスデモナは蹲踞いて公爵に接吻して嬉し氣に振返り〳〵去る。オセロは一寸腰を屈め立身のまゝ公爵の手に接吻して悠然と奥へ去る。

○第十一場、群集の歡迎、オセロはデスデモナと片手を握り合つた儘高く差し上げて、大勢の歡迎者に取捲れながら正面の天幕の内から來り、上手でデスデモナの頰に接吻して上手の方へ去る。一同續く。

○第十二場　デスデモナの居間。上手の椅子にデスデモナ腰をかけて居る、下手からイヤゴーの女房來つて、正面奥の戸口からカシオを導く。カシオ蹲踞いてデスデモナの手に接吻して後一通の歎願狀をデスデモナに渡す。デスデモナは受取りカシオを慰めて承諾をするので、カシオ喜んでデスデモナの手に再び接吻して、イヤゴーの女房と共に下手に去る。正面奥の戸口から、イヤゴー續いてオセロ現れ、オセロはカシオの後姿を嫉妬の眼を以て見送りつゝ下手に歩み、口許を

指で押へながら、ジロ〳〵四邊を見廻し、思ひ直して兩手を大きく擴げて、デスデモナの傍に進みデスデモナがカシオの歎願狀を渡すので、ジロリとイヤゴーとデスデモナの顏を見較べながら、荒々しき手付で歎願狀を讀み下し、尙も思ひ直して、デスデモナが左手を幾度も動かすのを見て、是に接吻して、右手をデスデモナの肩にかけて勞り〳〵靜に奧の戸口に誘ふ。其際デスデモナが手巾を落すをイヤゴー素早く拾ひ取り、右手のカウスの中に隱す。オセロはデスデモナを戸口の外に送り出し、又引返して正面へ來て、歎願狀を力なく落し、左の手を右の腋の下に挿み、右の手を下に垂れて、椅子にグッタリと腰をかけ、右の手を頰に當て、左の手を胸に置いて考へ、突然立ち上つてイヤゴーの胸倉を取つて押倒し、次に握り詰めた雙の拳で、イヤゴーを二度突いて念を押し、イヤゴーが去つてから、正面を切り、矢張右の拳で下を押し、兩手を張つて後へ廻し立身のまま煩悶の體。

○第十三場　カシオの部屋、上手の戸口よりイヤゴー、カシオの部屋へ忍び入りデスデモナの手巾をカシオの巾着の中に入れて去る、下手よりカシオ來り、其巾着を着けてイヤゴーの後を追ふ。

○第十四場　オセロ邸の庭園。オセロ上手の椅子に腰をかけて思案の體。イヤゴー下手より來る、オセロは右の手で下手を指差しながら立ち上り、兩手を丸く張つて拱み合せ、下手に絕えず注意しながら樹蔭に忍ぶ。カシオ下手から現れ上手迄進み、イヤゴーと立話をする。イヤゴーはカシオの隙を窺ひ、巾着から手巾を奪ひ取り、右手に持ちて、カシオに知らさぬ樣にしてオセロに示す。オセロは口に手を當てゝ窺ひ、忍び寄つて是を見て、兩手で頭の毛を掴みながら、タヂ〳〵と後へ下り、兩手を拱みながら怒りの眼鋭く上手を見詰める。カシオが下手へ去るので、オセロ握り詰めた手を頭に置きながら椅子にかゝり、兩手を膝の邊に擴げて、下から大きく抱へるやうにして左の乳房の上邊を押へ、又大きく輪のやう

に左右に廻して兩手を頰へ當て、兩手を擧げて腕を拱み苦悶の體にて、空を仰ぎ兩手を前へ突出して首と手を盛んに振り、片手でイヤゴーの首筋を捕へて尙も念を押すと、イヤゴー天に向つて遙拜して誓ふ、オセロも蹲踞いて祈る。

○第十五場　オセロ邸の玄關。ベニスの使者、大勢の軍人に出迎はれて、壇を登る。

○第十六場　オセロ邸の應接室。使者上手より來り、大勢の家來附き從ふ。デスデモナ、イヤゴー、カシオ、オセロと云ふ順に奥の戸口から出て來て皆々下手に控へる。獨りオセロのみ中央に進み、絶えずカシオとデスデモナを注視しながら招還狀を使者より受取つて讀み下し、カシオとデスデモナを睨み付けながら、怒りの相益激しく成る。デスデモナは案じてオセロに近寄る。デスデモナがオセロの腕に手をかけるをオセロ輕く振り、再びデスデモナがオセロの腕に縋ると強く振つて上手に向き直る。デスデモナ兩手で顏を掩ひながら附添ひの者に慰められつゝ、悲し氣に奥に入る。オセロは左の手を強く後へ振つて一同を却け、次に右の手を後へ振つて、其手を頭の上に置き、それから右の手を左の方へ振り、二三歩前へよろけて右足を立てゝ屈み、右足を折つて、グル〳〵と室内を轉げ廻り、起き上つて椅子に腰をかけ、グッタリとして兩手を擴げ悄然として、右手を頭の上に置き俯向くと、下手からイヤゴーが心地よげに覗いて居る。

○第十七場　寢室。上手の寢臺に仰向けになつて、デスデモナ眠つて居る。オセロ顏色憔悴の體にて下手の戸口から入り來り、正面の棚にある燈火を消して下手に置き、デスデモナの方を見て煩悶の科あつて、兩手を左右へ擴げ、天に向つて祈り、デスデモナの顏に兩手をかけて其頰に接吻して、又空を仰ぎ、兩手を擴げて前へ次に横に突出し後キットなつて、デスデモナを搖り起し、右手で下手を指差しながらデスデモナを責める。それからデスデモナを下手に運んで、右の手を振上げながら責め、棚にある刀を取つて、左の手を右の腋に挿み、右の手に刀を

持て振上げ斬らんとすると、デスデモナ驚いて兩手を大きく輪を畫いて後へ廻し倒れる。オセロは夫を見て刀を後へ落し、デスデモナに接吻して、空を仰ぎながら、デスデモナを締殺し、デスデモナを上手の寢臺の端に仰向けに据ゑ、中腰で手を擴げて茫然として居る、デスデモナは手を動かしながら絶命する。イヤゴーの女房下手から入り來り、オセロの無情を責める。オセロ立ち上つて片手を頰に置き、胸に手を拱み合し次に兩手を十字に違へて肩の上に置き、右手で刀を取つて、下手に居るイヤゴーを刺し、自分も左の手を右の腋の下に當て、右の手で刀を取り、首の右側から斬る。バッタリ前に倒れて刀を落して俯向き、後顔を上げ三度右の手で胸を叩き、蹌踉いて、デスデモナの近くに來り、一寸倒れて起き上り、右の手でデスデモナの顔を押へ、左の手でデスデモナの手を取りながら絶命する。

ハムレット

○第一場　宮城内の一室。正面一段高き所に王と妃、其前にポロニヤスとオフリヤが居る。ポロニヤスは立つて盛んに手を動かして居り、オフリヤは中腰で本を開いて王と妃に見せて居る。ハムレット上手から本を讀みながら來り、是を見て立止り、二足奥へ進み、右手を上げて二度手を上へ上げて指し、後其手を左の本を持て居る手の腋の下に挿み、又右手を動かして、本を讀みながら、絶えず奥の方を注意して居る、王は手を振つて妃を連れ立つて段を下り下手へ去る。ポロニヤスも盛んに手振りをして、ハムレットの方を見ながら續いて去る。ハムレットは右手を上げながら、下手の方へ行かうとして、オフリヤに遮られ、其手をオフリヤの肩にかけ接吻し、又別れて上手の方へ戻り、オフリヤの差し出す草花樣の物を蹲踞いて受取り、これに接吻して前に下げて居る巾着に納め、蹲踞いたま